



第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム

防災教育フォーラム

「子どもが主役の防災教育」の実践

～ぼうさい探検隊これまでの10年とこれからの10年～

報告書

<主催>

日本損害保険協会／朝日新聞社／日本災害救援ボランティアネットワーク

<後援>

内閣府／文部科学省／警察庁／消防庁／気象庁／UNESCO／
日本ユネスコ国内委員会／日本ユネスコ協会連盟／
全国都道府県教育委員会連合会／宮城県教育委員会／仙台市教育委員会／
沖縄県／アジア防災センター／日本損害保険代理業協会／
宮城県損害保険代理業協会／河北新報社／NHK仙台放送局／TBC東北放送
(順不同)

損保協会は、損害保険会社を会員とする事業者団体です。

損害保険は、皆さまの平穏な生活や安定した事業活動のお手伝いをするという社会的役割を担っています。損保協会では、この社会的役割を着実に果たすために、消費者の皆さまとのコミュニケーションを推進し、皆さまからいただいたご意見に基づき業務品質の向上を図っています。

また、損害保険事業を通じて蓄積してきたノウハウを活かし、防災・防犯対策、交通安全対策および環境問題に関する取組み等、幅広い活動を行っています。

■設立

1946年1月 設立
1948年5月 社団法人の認可を取得
2012年4月 一般社団法人に移行

目 的

わが国における損害保険業の健全な発展および信頼性の向上を図り、もって安心かつ安全な社会の形成に寄与することを目的としています。

事業内容

1. 損害保険の普及啓発・理解促進に資する事業
2. 損害保険契約者等からの相談対応、苦情・紛争の解決に資する事業
3. 損害保険業の業務品質の向上に資する事業
4. 損害保険業の基盤整備に資する事業
5. 事故、災害および犯罪の防止・軽減に資する事業
6. 損害保険業に関する研修、試験および認定等の事業

会員会社（26社50音順、2015年4月1日現在）

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	ソニー損害保険株式会社
アイペット損害保険株式会社	損害保険ジャパン日本興亜株式会社
アクサ損害保険株式会社	そんぽ24損害保険株式会社
朝日火災海上保険株式会社	大同火災海上保険株式会社
アニコム損害保険株式会社	東京海上日動火災保険株式会社
イーデザイン損害保険株式会社	トーア再保険株式会社
エイチ・エス損害保険株式会社	日新火災海上保険株式会社
SBI損害保険株式会社	日本地震再保険株式会社
au損害保険株式会社	日立キャピタル損害保険株式会社
共栄火災海上保険株式会社	富士火災海上保険株式会社
ジェイアイ傷害火災保険株式会社	三井住友海上火災保険株式会社
セコム損害保険株式会社	三井ダイレクト損害保険株式会社
セゾン自動車火災保険株式会社	明治安田損害保険株式会社

東日本大震災以降、地域における次世代の防災リーダーを担う子どもたちへの防災教育の大切さが注目されています。

また、2015年度の多くの小学校教科書（特に3・4年生・社会科）には「まちの安全マップづくり」等が盛り込まれています。

防災教育の普及・啓発を通じて「安心・安全な社会づくり」に貢献することは、私たち日本損害保険協会の大きな役割と考えています。

そこで、私たちは、子どもたちがまちなかを探検し地域や身の回りの危険を調べて気づいた結果を「マップ」にまとめる実践型防災教育プログラム「ぼうさい探検隊」を提案しています。

2004年度から「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」を実施し、これまで、のべ11万人を超える子どもたちが参加してくれました。

本パブリックフォーラムは、子どもが主役の地域に根ざした防災教育の大切さを実感していただくことを目的として実施しました。

第1部が2015年度のマップコンクール表彰式、第2部がパネルディスカッション形式による「防災教育フォーラム」を行い、「ぼうさい探検隊」のこれまでの10年を振り返り、これからの10年を展望しました。

目次

■プログラム	3
■フォーラムダイジェスト	6
■主催者挨拶	13
■第1部「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式	15
■第2部「防災教育フォーラム」 有識者ディスカッション「子どもが主役の防災教育」の実践	19
■閉会挨拶	45
■参加者アンケート結果	46

13:30 主催者挨拶：一般社団法人 日本損害保険協会 会長 櫻田 謙悟

13:35 第1部「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式

全国47都道府県の511団体から寄せられた過去最多2,267作品のうち、特に優秀な9作品を表彰しました。

審査員長 室崎 益輝 氏（神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センター長）

◇文部科学大臣賞

北海道札幌南区川沿少年消防クラブ 「南区川沿大雨みまもりたい」

プレゼンター 文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課 安全教育調査官 佐藤 浩樹 氏

◇防災担当大臣賞

福島県相馬市立中村第二小学校 放課後児童クラブ かもめクラブ 「かもめ防災探検隊」

プレゼンター 内閣府政策統括官（防災担当）付 参事官（事業推進担当） 四日市 正俊 氏

◇消防庁長官賞

愛媛県愛南町立福浦小学校 「風の子ダイヤモンド」

プレゼンター 消防庁 国民保護・防災部 地域防災室長 河合 宏一 氏

◇まちのぼうさいキッズ賞（日本ユネスコ国内委員会会長賞）

沖縄県糸満市立糸満がじゅまる児童センター 「イチマンがじゅまるチーム」

プレゼンター 文部科学省 国際統括官付専門職 二村 肇 氏

◇気象庁長官賞

茨城県鹿嶋市立平井小学校 「平井っ子 防災探検隊」

プレゼンター 気象庁長官 西出 則武 氏

◇キッズリスクアドバイザー賞（日本損害保険代理業協会賞）

ガールスカウト千葉県第3団 ジュニア部門 「西船KIDS」

プレゼンター 一般社団法人 日本損害保険代理業協会 会長 岡部 繁樹 氏

◇未来へのまちづくり賞（朝日新聞社賞）

三重県鳥羽市安楽島子ども会 「安楽島キッズ探検隊」

プレゼンター 朝日新聞社 ブランド推進本部長補佐 坂野 康郎

◇わがまち再発見賞（日本災害救援ボランティアネットワーク賞）

ガールスカウト神奈川県第53団 「GS KANAGAWA 53」

プレゼンター 特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク 理事長 渥美 公秀

◇ぼうさい探検隊賞（日本損害保険協会賞）

石川県かほく市子ども会 宇ノ気支部 内日角子ども会（青葉・青空） 「内日角守り隊」

プレゼンター 一般社団法人 日本損害保険協会 会長 櫻田 謙悟

14:25 休憩（15分）

14:40

第2部「防災教育フォーラム」有識者ディスカッション「子どもが主役の防災教育」の実践

子どもが主役となる防災活動として2004年度から実施している「ぼうさい探検隊」について、防災の専門家や実践者を招いたディスカッションにより、これまでの10年を振り返り、防災教育の今後を展望しました。

コーディネーター

むろさき よしてる

室崎 益輝 氏 【神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センター長】



1969年から本格的に防災研究を始め、以後40年以上に亘り防災・復興研究を続けている。阪神・淡路大震災で自らが被災者となって以降、防災について市民に直接語りかけることの重要性を改めて認識し、地震出火リスク調査や被災地復興物語調査といった研究の傍らボランティアや講演活動にも精力的に取り組んでいる。日本火災学会賞、日本建築学会賞、防災功労者内閣総理大臣表彰等を受賞。日本火災学会会長、日本災害復興学会会長、消防審議会会長等を歴任し、現職。

パネリスト

あつみ ともひで

渥美 公秀 氏 【日本災害救援ボランティアネットワーク (NVNAD) 理事長】



自宅のあった西宮市で阪神・淡路大震災に遭い、避難所などでボランティア活動に参加。以後、NVNADの活動を中心に、被災者の心に寄り添うことを大切にしながら、2004年新潟中越地震では小千谷市塩谷へ、また東日本大震災では岩手県野田村へ長期の支援を続けている。2010年 大阪大学大学院人間科学研究科教授に就任。ほかに日本災害復興学会副会長も務め、多くの社会活動を行っている。

やまもと としや

山本 俊哉 氏 【明治大学理工学部建築学科教授】



関係行政機関や民間企業、NPO等と連携し、安全・安心（防災・防犯）、アート、建築・都市再生等、幅広い視野から都市計画を研究。国内外で都市再生の支援活動に取り組むほか、最近では、陸前高田の震災復興まちづくりの支援にも力を入れており、被災低地からの避難経路や所要時間などを示した「逃げ地図」作成ワークショップを各地で開催している。

きはら ようこ

木原 要子 氏 【愛媛県愛南町立福浦小学校校長（2015年4月から愛媛県愛南町立東海小学校校長）】



2008年度、文部科学省委託「地域ぐるみの学校防災推進研究事業」の研究拠点校（愛南町立東海小学校）での1年間の研究・実践が、本格的に防災教育に取り組む契機になる。防災マップ作成を教育活動に位置付け、児童の意識高揚を目的に毎年「ぼうさい探検隊マップコンクール」に応募。学校における防災教育の推進には、家庭・地域との連携が重要であり、「自分の命は自分で守る」力を身に付けた児童は、災害から地域を守る力になれると考えている。

ありさか

蟻坂 みどり 氏 【第1回マップコンクール入賞者・大学生】



2004年 第1回ぼうさい探検隊マップコンクールに参加し、石巻市立湊小学校「はちまんあるある探検隊」が全国入賞。2005年湊中学校 防災講習会で独居高齢者宅の家具転倒防止器具取り付けに参加。2010年 高校3年の時に地元小学校の「自然災害を知る会」に招かれ新しいマップ作りを提案。2011年3月 高校卒業直後に被災。地元八幡市内での救援物資の配給作業に携わるとともに、所属するボーイスカウトからの要請で石巻にてボランティア活動に従事。宮城学院女子大学3年在籍中。

ビデオ出演

ながい きよみ

永井 清美 氏 【福島県相馬市川原町児童センター所長】



1982年 日本損害保険協会 奥さま防災博士（現：支部防災博士）に就任。約32年間幼児と小学生の防災教育に取り組む。また1992年 日本赤十字社救急指導員、1996年に相馬広域消防本部第1号救急指導員となり、救急普及と指導にあたる。東日本大震災後、少年消防団を結成し、消火、救急規律訓練、歳末助け合い募金活動、防災マップ作り等子ども達の防災意識の向上と社会のために貢献出来る人材育成に団員長として共に尽力している。

進行

みやた けいこ

宮田 敬子 氏 【フリーアナウンサー・東北放送ラジオパーソナリティー】



2000年東北放送に入社。報道番組などを担当する。退職後は、フリーアナウンサーとして、東北放送のラジオ番組COLORSなどを担当。番組では、震災以降、復興活動や防災活動などに尽力される方に毎週インタビューを続ける。またエネルギー問題に関する座談会やシンポジウムの司会も担当するほか環境問題にも関心が高く、エコプールの認定を受ける。家庭では、二児（3歳と7歳）の母。

16:15 閉会挨拶： 佐藤 浩樹 氏 【文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課 安全教育調査官】

16:20 閉会

■タイトル	防災教育フォーラム「子どもが主役の防災教育の実践」 ～ぼうさい探検隊これまでの10年とこれからの10年～
■日時	2015年3月15日(日) 13:30～16:20 (13:00受付開始)
■会場	TKPガーデンシティ仙台・ホールB 宮城県仙台市青葉区中央1-3-1 AER21階
■プログラム	主催者挨拶 一般社団法人 日本損害保険協会 会長 櫻田 謙悟
13:30～14:25	第1部 「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式
14:40～16:20	第2部 「防災教育フォーラム」 有識者ディスカッション「子どもが主役の防災教育」の実践 ・コーディネーター 室崎 益輝 氏 (神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センター長) ・パネリスト 渥美 公秀 氏 (日本災害救援ボランティアネットワーク理事長) 山本 俊哉 氏 (明治大学理工学部建築学科教授) 木原 要子 氏 (愛媛県愛南町立福浦小学校校長) 蟻坂 みどり氏 (第1回マップコンクール入賞者 大学生) ・ビデオ出演 永井 清美 氏 (福島県相馬市川原町児童センター所長) ・進行 宮田 敬子 氏 (フリーアナウンサー・東北放送ラジオパーソナリティ)
	閉会挨拶 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課 安全教育調査官 佐藤 浩樹 氏
■告知	新聞 (朝日新聞) WEB (日本損害保険協会ホームページ) チラシ
■参加者	合計約265名 入賞団体関係者、教育・学校関係者、消防関係者、一般参加者、 日本損害保険協会関係者、プレス 他
■主催・後援	主催：日本損害保険協会／朝日新聞社／日本災害救援ボランティアネットワーク 後援：内閣府／文部科学省／警察庁／消防庁／気象庁／UNESCO／ 日本ユネスコ国内委員会／日本ユネスコ協会連盟／ 全国都道府県教育委員会連合会／宮城県教育委員会／仙台市教育委員会／ 沖縄県／アジア防災センター／日本損害保険代理業協会／ 宮城県損害保険代理業協会／河北新報社／NHK仙台放送局／TBC東北放送 (順不同)

主催者挨拶（要旨）

一般社団法人 日本損害保険協会 会長 櫻田 謙悟



櫻田 謙悟 日本損害保険協会会長

- 損保業界では、自然災害に対する取組みが中長期的に極めて重要な課題であるとの認識のもと、わが国の、そして世界の防災・減災に貢献できるよう、引き続き取り組んでいきたいと思っている。
- 損保業界では、全国一律ではない、地域特性に応じたその地域、地域のリスクの程度が変わってきたということを強く認識している。そういう意味で、地域特性に応じた防災・減災に取り組む必要があると強く感じている。
- そうした中でも草の根的な位置づけである「ぼうさい探検隊」の活動というのは、大いに意義があるものだと考えており、これがさらに世界に広がっていくことを期待している。
- 「ぼうさい探検隊」をはじめ、私どもの防災教育活動、そして皆さま方の日ごろの防災・減災に対する取組みが、これからの安心、安全な日本を作っていくその原動力となることを祈念している。

【第1部】

「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式

全国47都道府県の511団体から2,267作品の応募があり、17,187人の児童がこの活動に取り組んだ。文部科学大臣賞など入賞9作品を表彰するとともに、子どもたちに受賞の喜びをインタビューした。

◇文部科学大臣賞

北海道札幌南区川治^{かわぞえ}少年消防クラブ

◇防災担当大臣賞

福島県相馬市立中村第二小学校 放課後児童クラブ かもめクラブ

◇消防庁長官賞

愛媛県愛南町立福浦^{あいなん ふくうら}小学校

◇まちのぼうさいキッズ賞（日本ユネスコ国内委員会会長賞）

沖縄県糸満市立糸満がじゅまる児童センター^{いとまん}

◇気象庁長官賞

茨城県鹿嶋市立平井^{かしま}小学校

◇キッズリスクアドバイザー賞（日本損害保険代理業協会賞）

ガールスカウト千葉県第3団ジュニア部門

◇未来へのまちづくり賞（朝日新聞社賞）

三重県鳥羽市安楽島^{あらしま}子ども会

◇わがまち再発見賞（日本災害救援ボランティアネットワーク賞）

ガールスカウト神奈川県第53団

◇ぼうさい探検隊賞（日本損害保険協会賞）

石川県かほく市子ども会^{うのけ} 宇ノ気支部内日角^{うちひすみ}子ども会



入賞団体への表彰



入賞団体へ喜びのインタビュー

【子どもたちの喜びの声】

- 地域のことについて、とても詳しく知れる良い機会だったので、とても良かったと思います。
- こんなすばらしい賞をいただけて、とてもうれしく思っています。私もこの震災を忘れないし、周りの人にもこの震災を忘れないで欲しいという願いを込めてマップを作りました。これからマップをチラシにし、みんなに配りたいと思います。
- 地域で活動するのが、とても楽しかったです。おっちゃんたちにも協力してもらって、この賞をもらった時に、みんなで大喜びしました。ありがとうございました。
- 暑くて大変だったけど、みんなでがんばって、安全マップを作りました。そして今ここで、賞をもらったので、とてもうれしいです。
- 今回このような賞に選ばれて、とてもうれしく思います。夏休みの1ヶ月間をこの防災マップづくりに使って、暑い夏に、みんなで避難所まで実際に歩いたりすることは大変だったけれど、賞に選んでいただいたことが、うれしいです。ありがとうございました。
- みんなで作ったマップが、今回できた新しい賞に入賞して、うれしいです。
- 10年間参加し続けて、今こうして賞をいただけることを、本当にうれしく思います。ありがとうございました。
- 今回、賞をいただいて、うれしいです。みんなで、力を合わせてマップを作ったので、大事なところとかを、ペンとかで線で引いたりすることができて良かったです。
- これからも地域みんなと安心安全な内日角（石川県かほく市）を作って行きたいと思いました。ありがとうございました。

「ぼうさい探検隊」へのメッセージ（要旨）

ライヒ アレクサンダー 氏（ユネスコ本部 ESD（持続可能な開発のための教育）最高責任者）

- 若い年代の方々が、非常に心をこめて、関心をもたれて、そして楽しく、このような「ぼうさい探検隊」の取組みをされていることを大変嬉しく思う。
- 今回の取組みは他に例の無い独特なもの、かつ革新的な防災教育へのアプローチを示されたものである。地域の方々とのやりとりを通して、その結論がこの地図の中にしっかりと反映されていると思う。
- 危険箇所をきちんと示して、どこで災害の危険があるのか、犯罪、交通安全の観点からどういったところに危険があるのか、防災、防犯、交通安全を意識して示されている。こういった安心・安全ということだけではなく、地域の一員として子どもたちが成長をすることにも役立つのではないかと思う。それがひいては地域の強化へとつながっていくと思う。



ライヒ アレクサンダー氏
によるメッセージ

審査総評（要旨）

審査員長 室崎 益輝 氏（神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センター長）

- 今回は、マップコンクールを始めてちょうど11年目に当たる。11年目というのは、10年の節目を終えて、さらなる高い山に向かって再スタートする時だと思う。その再スタートの1年目、ということで申し上げますと、とても素晴らしい作品をたくさん寄せていただいた。とても素晴らしいことだと思う。
- 今回は科学の心が入ったと思う。歩き回って時間を計る。津波がどこまで来たか、水がいつ、雨の日や晴れの日どこまで来たかということ調べる。ホイッスルの音がどこまで聞こえたかを調べる。まさにそれは大人の科学者以上に科学的な心がそこにあったと思う。
- この3年間、なかなか被災地から作品が出てこなかった。ところが今年は、岩手・宮城・福島から30団体の作品が出た。これだけでも素晴らしいことである。



室崎審査員長の総評

【第2部】

「防災教育フォーラム」有識者ディスカッション「子どもが主役の防災教育」の実践

パネリスト（防災の専門家や実践者）等により、「ぼうさい探検隊」のこれまでの10年を振り返り、防災教育の今後を展望するディスカッションを行った。

【主な発言】

①「ぼうさい探検隊」のこれまでの10年

■ディスカッションの全体趣旨、「ぼうさい探検隊の原点」

- ・この10年間を振り返ってみて、「ぼうさい探検隊」の取組みの教訓、意義というものを、いったんしっかり振り返ることが必要だと思う。そのうえで、さらに、防災教育や「ぼうさい探検隊」の取組みをどう進めていったらいいのかということをは今日は考えたい。（室崎氏）
- ・阪神・淡路大震災が発生した時に兵庫県の西宮市に住んでおり、神戸大学の教員をしていた。大変な目にあったということが取組みの最初のきっかけである。防災について、地図を作って工夫してやってみたらどうか、ということ団体を思いついた。「防災」、「防災」、「防災」と言うのではなく、「街歩き」から始まっていった。防災はわからないというなかで、「街の探検ですよ」と始めていくことで結果的に防災ができればいいという発想になっていった。（渥美氏）
- ・これを西宮の片隅でやっていた。損保協会の方に目を留めていただいて、これをやってみないかと言ってくださった方がいた。そして広げていただくにあたって、さらに朝日新聞の方からも絶大なご支援をいただいた。—NPOが西宮で仮にいいことをやったとしても、なかなか広がらない。これだけ損保協会の方に広げていただき、朝日新聞社で報じていただいたこと、これらをもってやっところまで来たというような歴史を感じている。（渥美氏）



室崎 益輝氏と宮田 敬子氏

■「ぼうさい探検隊」実践の現場から

「福島県相馬市川原町児童センターおよび愛媛県愛南町立福浦小学校での取組みのVTRを上映」

- ・非常に印象に残ったのは、子どもを信頼している、子どもの力を引き出す、子どもが主人公だということを考えて取組んでいること。もう一つは、地域に出て地域の中で考える、地域の人と一緒に進むという地域とのつながりをとても大切にしていること。（室崎氏）
- ・平成20年度に勤めていた小学校が、地域ぐるみの学校防災の推進研究、1年間の研究の指定の拠点校ということになって、その時が本当に学校での防災教育の初めての取組みだった。その時に、やはり学校でやるだけではなくて、なにか学校で取り組んだことが地域に返されるもの、その目玉としたいと考えた一つが防災マップであった。（木原氏）



渥美 公秀氏と木原 要子氏

■「ぼうさい探検隊」に参加して

第1回「ぼうさい探検隊」マップコンクールに参加：蟻坂 みどりさん

- ・私たちのときは6年生だけで（「ぼうさい探検隊」を）やった。6年生ともなると、もうあまり遊ばなくなる友達も増えてくる。防災マップを作ることによって、あまり関わりがなくなっていた子どもと繋がれるし、しゃべれるし、一緒に行動できるし、低学年の頃のように、誰とでも昔のように仲良くなれた。
- ・防災マップを作ったときに、井戸をマップに取り入れたので、東日本大震災のとき、実際にその井戸がどこにあるか頭の中に入っていた。また、私と一緒に活動した友達も、井戸がある場所を覚えていたので、そこに水汲みに来る人がとてもたくさんいた。



山本 俊哉氏と蟻坂 みどり氏

■マップ作りのポイント／アドバイス



マップ紹介

- ・マップが、子どもたちと地域をつないでいくコミュニケーションのツールになっている。防災はリスクコミュニケーションが重要。（山本氏）
- ・マップは、ただ単にハザードマップというものではなくて、地域とのコミュニケーションに大きな役割を果たしているものだのとらえている。（木原氏）
- ・子どもたちがマップを作ってその辺を歩いてくれている、それは地域の方には刺激になる。（渥美氏）

②これからの「防災教育」の課題

■防災まちづくりの専門家の視点から：山本 俊哉 氏（明治大学理工学部建築学科教授）

- ・「逃げ地図」、「避難地形時間地図」とも言う取組みを進めている。津波からの逃げ地図を基本にしている。東日本大震災の（被災地である）宮城県から岩手県陸前高田へ広がっていった方法で、避難の目標のポイントまでの時間と経路を色塗りした地図である。
- ・この地図の特徴は、一目で安全な避難場所までの避難時間がわかること、どの経路を通ったらいいのかが見えること、避難者の視点に立ったリスクの可視化である。
- ・河津町の小学校で保護者が集まって家庭学級で（逃げ地図づくりを）やってみた。小学校でもやろうということになって、大学院生たちが教材を作った。そうしたところ、見事によくわかるものができた。やはり子どもたちのエネルギーはすごいし、大学の教育の一環でやっているが、大学院生も育っていく。こういうものも一つのバージョンとして入れていけるといいと思う。



山本 俊哉氏

■これからの防災教育のあり方とは

- ・4月から使われる新しい3、4年生の社会科の（教科書の）中で「安全マップを作りましょう」というのは、どの出版社にも載っている。これだけきちんと書いてあると、カリキュラムの中に入れなければいけない。（木原氏）
- ・これまでのマップが、どこにいったら手に入るかというホームページになる。マップ集を出してみてもいいのではないか。いろいろな人が手に取って見ることができればいい。そして、学校教育と連動させてみるというのも一つの方法かと思う。（渥美氏）
- ・学校の先生は準備で大変だと思う。地域の人たちに協力してもらって、負担をシェアしていったほうがいいと思う。もう一つは、授業でやったものが地域の取組みにつながっていくということ。単発ではなく連続的に。そういう視点で取り組んだほうがいい。（山本氏）
- ・世代を超えて教え合う、子どもの気づきに大人が気づくという部分もあるが、逆に言うと、大人の動きに子どもが学ぶということも当然ある。子ども同士でも、上の子に下の子が学ぶ、あるいは下の子に上の子が学ぶ、そういう世代を超えた学び合いみたいなものをこのマップ作りの軸にする。マップを作るときに、大学生や大学院生が手伝いに入っている例が挙げられた。幼稚園児が小学生と一緒にやっている例も多い。いろいろな世代を超えたつながりが生まれてきているというのは、とても素晴らしい。（室崎氏）



熱いディスカッション

閉会挨拶（要旨）

文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課 安全教育調査官 佐藤 浩樹 氏

- 現在は文部科学省で防災教育を含む学校の安全に関する仕事をさせていただいている。東日本大震災の被災地、他の災害の被災地、あるいは学校の事故等の現場に出向き、被害者やご遺族の方からお話、お気持ちをお伺いする機会がある。二度と同じような事故・災害が発生しないよう、安全教育・防災教育をいっそう充実させていかなければならないと強く思っている。
- 現行の学習指導要領では、防災教育を含む安全教育について学校の教育活動全体を通じて適切に行うよう示されている。しかし、すべての学校において効果的に行われてはいないのではないかと指摘もある。そこで、安全教育の充実を図るため、今年度、中央教育審議会に学校安全部会を立ち上げ、指導時間をきちんと確保すること、子どもたちが身につけるべき資質や能力を明確化して指導体制を充実させること、こういった環境整備を図ることが重要であるという取りまとめを平成26年11月にしたところである。
- また、平成24年4月に閣議決定された「学校安全の推進に関する計画」に沿って、教職員の資質向上のため、たとえば大学の教員養成課程の中できちんと安全や防災について指導していく、現職の教員についても研修をいっそう充実させる、こういったことの検討準備を進めている。
- 「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」でのマップ作りの活動が、いわゆる危険回避能力育成に大きな影響を与えているということ、また、学校の仲間、家族、さらには地域を巻き込んで大きな動きに発展していること、そのような10年の成果の広がりをあらためて感じる事ができた。今、政府が掲げている、強くてしなやかな街づくり・国づくり、すなわち国土強靱化の政策にも合致するものと思う。今後もこのコンクールがますます発展し、多くの子どもたちが防災や安全について力をつけていくことを願う。



文部科学省
スポーツ・青少年局学校健康教育課
安全教育調査官
佐藤 浩樹 氏

皆さま、こんにちは。防災教育フォーラム開会にあたりまして、主催者を代表して一言ご挨拶申し上げます。

ご当地仙台では、昨日から「第3回国連防災世界会議」が開催されております。

私も日本損害保険協会の会長として、昨日、国連主催の本体会議のパネルディスカッションに参加し、官民一体で運営している日本の地震保険制度について発表を行い、有益な意見交換をさせていただきました。

損保業界では、自然災害に対する取組みが中長期的に極めて重要な課題であるとの認識のもと、わが国の、そして世界の防災・減災に貢献できるよう、引き続き取り組んでいきたいと思っております。

さて、本日の防災教育フォーラムでは、第1部で第11回「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」の表彰式、そして第2部では、「ぼうさい探検隊」の今後の展望をテーマにパネルディスカッションを行います。マップコンクールに見事に入賞されました小学生の皆さま、今日は、入賞、おめでとうございます。すでに11年目となる今回は、全国から511もの小学校や団体に参加していただき、過去最多の2,267作品の応募がありました。どの作品も、地域の方々に伝えよう、知ってもらおう、という皆さまの強い思いが伝わってくる力作が多く、審査員の先生方もおそらく入賞作品の決定には大変ご苦労されたのではなかろうかと思っております。

さて、入賞された皆さまの作品は、そのまま地域の安全マップとして活用できるほどの素晴らしい出来栄になっておりまして、その完成度の高さに皆さまも驚かれていますことと思います。これからも今回の経験を活かして、地域の、そして全国の子どもの防災・減災のリーダー役として大いに活躍していただければと願っているところでございます。ぜひ頑張ってください。

小学生の皆さまをご指導いただきました、先生方、あるいは地域の皆さま方、これまでの熱心なご指導の成果として入賞されましたこと、誠にご同慶の至りでございます。

学校教育におきましては、2015年度から、小学校3、4年生の社会科の教科書に「地域の安全マップ」という項目が新たに上げられることになりました。

損保業界は、文部科学省が推進しておられる土曜日の教育活動推進プロジェクト、この中における教育ボランティア応援団として協力しております。関係省庁はじめ、プレゼンターの皆さま、日ごろから「ぼうさい探検隊」の取組みにご理解・ご支援をいただきまして、誠に有難うございます。改めまして感謝申し上げます。

小学生の皆さんのマップ作成にあたり、地域の役所や消防、警察など、皆さま方には日ごろから大変なご支援をいただいていると伺っております。損保業界では、全国一律ではない、地域特性に応じたその地域、地域のリスクの程度が変わってきたということを強く認識しております。そういう意味で、地域特性に応じた防災・減災に取り組む必要があると強く感じております。そうした中でも草の根的な位置づけである「ぼうさい探検隊」の活動というのは、大いに意義があるものだと考えており、これがさらに世界に広がっていくことを期待しているところであります。

第2部におきましては、防災教育の専門家の先生方や子どもたちに防災マップ作りをご指導されている方々をお招きして、これまでの活動を振り返って、パネルとして今後の展望をご論議いただきたいと思いますと思っております。

日本の場合は、大型の台風の回数が必ずしも統計上、増えているとはこの数十年間言われておりません。その一方で地域的に、爆弾低気圧等に象徴される集中的な豪雨が非常に増えているというのも事実であります。つまり、地域によって危険の度合いがだいぶ違ってきているという現象が起きているところであります。そういったことも踏まえまして、子どもが主役の防災教育というものが、地域のための防災教育というふうに変わってくると私は信じております。

「ぼうさい探検隊」をはじめ、私どもの防災教育活動、そして皆さま方の日ごろの防災・減災に対する取り組みが、これからの安心、安全な日本を作っていくその原動力となることを祈念いたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日は、入賞おめでとうございます。

2015年3月
一般社団法人 日本損害保険協会
会長 櫻田 謙悟

第1部「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」表彰式

2014年4月から11月まで募集した「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」について表彰を行った。表彰に当たって、

■各賞入賞団体への賞状贈呈

■審査総評

■記念撮影

を行った。



入賞団体への表彰

各賞の入賞団体は次の通りである。

◇文部科学大臣賞

防災教育に対する学習意欲が感じられ、かつ仲間との協調性が感じられる作品に授与

入賞団体 北海道札幌南区川沿少年消防クラブ^{かわぞえ} 「南区川沿大雨みまもりたい」

プレゼンター 文部科学省スポーツ・青少年局 学校健康教育課 安全教育調査官 佐藤 浩樹 氏

◇防災担当大臣賞

地域の防災意識向上や地域住民の防災対策に役立つ作品に授与

入賞団体 福島県相馬市立中村第二小学校 放課後児童クラブ かもめクラブ 「かもめ防災探検隊」

プレゼンター 内閣府政策統括官(防災担当) 付 参事官(事業推進担当) 四日市 正俊 氏

◇消防庁長官賞

消防の施設、設備がしっかり調べられ、災害発生時の被害軽減に役立つ作品に授与

入賞団体 愛媛県愛南町立福浦小学校^{あいなん ふくうら} 「風の子ダイヤモンド」

プレゼンター 消防庁 国民保護・防災部 地域防災室長 河合 宏一 氏

◇まちのぼうさいキッズ賞(日本ユネスコ国内委員会会長賞)

地域の情報を細かく取材し、子どもたちによる独自の提案が見られる作品に授与

入賞団体 沖縄県糸満市立糸満がじゅまる児童センター^{いとまん} 「イチマンがじゅまるチーム」

プレゼンター 文部科学省 国際統括官付専門職 二村 肇 氏

◇気象庁長官賞

様々な自然災害から身を守るような防災意識の高い作品に授与

入賞団体 茨城県鹿嶋市立平井小学校^{かしま} 「平井っ子 防災探検隊」

プレゼンター 気象庁長官 西出 則武 氏

◇キッズリスクアドバイザー賞(日本損害保険代理業協会賞)

まちに潜むリスクを発見・発信し、地域の安心・安全に貢献している作品に授与

入賞団体 ガールスカウト千葉県第3団 ジュニア部門 「西船KIDS」

プレゼンター 一般社団法人日本損害保険代理業協会 会長 岡部 繁樹 氏

◇未来へのまちづくり賞（朝日新聞社賞）

地域の特色や防災に関する情報が第三者にもわかりやすく表現されている作品に授与

入賞団体 三重県鳥羽市安楽島子ども会 「安楽島キッズ探検隊」

プレゼンター 朝日新聞社 ブランド推進本部長補佐 坂野 康郎

◇わがまち再発見賞（日本災害救援ボランティアネットワーク賞）

地域の災害の特性を理解し、地域への関心や愛着心が感じられる作品に授与

入賞団体 ガールスカウト神奈川県第53団 「GS KANAGAWA 53」

プレゼンター 特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク 理事長 渥美 公秀

◇ぼうさい探検隊賞（日本損害保険協会賞）

地域や人々とのつながり及び安全・安心への意識の高まりが感じられる作品に授与

入賞団体 石川県かほく市子ども会 宇ノ気支部 内日角子ども会（青葉・青空）「内日角守り隊」

プレゼンター 一般社団法人 日本損害保険協会 会長 櫻田 謙悟

審査員特別賞の紹介

- ◆北海道豊平区^{とよひら}月寒^{つきさむ}少年消防クラブ 「月寒ぼうさい探検隊」
- ◆静岡県清水^{うど}有度少年教室 「ひまわり探検隊」
- ◆福井県小浜市^{くちなた}立口名田小学校 「立口名田小学校4年生」
- ◆滋賀県野洲市^{やす}社会福祉協議会 北野学童保育所 「北野っ子」
- ◆滋賀県高島市マキノ町^{まきの}辻区子供会 「辻区子供会」
- ◆和歌山県橋本市^{おうち}立応其小学校 「いのちをまもる」
- ◆広島県府中町少年少女消防クラブ 「府中町 女子チーム」
- ◆愛媛県^{あいなん}愛南町立緑小学校 「ぼうさいグリーン隊Cチーム」

「ぼうさい探検隊」へのメッセージ

ライヒ アレクサンダー 氏 (ユネスコ本部 ESD (持続可能な開発のための教育) 最高責任者)

ご来席の皆さま、今回のマップコンクールに参加されたお子様の皆さま、関係者の皆さま、このような場所でユネスコを代表いたしましてご挨拶できますことを大変嬉しく思っております。

ユネスコというのはご存知の通り、教育を専門にした国連の機関であり、その中でも防災教育に非常に力を入れている機関であります。だからこそ、今回の国連世界防災会議におきましても、大きな代表団を送りこんでおります。今回は、この防災教育に対して皆さまが、非常にコミットメントして、非常に努力をされて、非常に深く情熱をもって参画されている様子を拝見できて、大変嬉しく思いました。この若い年代の方々が、非常に心をこめて、関心をもたれて、そして楽しく、このような「ぼうさい探検隊」の取組みをされているということも大変嬉しく思っております。

また、今回の取組みは他に例のない独特なもの、かつ革新的な防災教育へのアプローチを示されたものであると思います。この取組みのなかで、子どもたちが地域を探検して、そして地域の特性を理解し、その中で子供たちが地域とつながりを持ち、そして地域にアクセスをして実践的な方法といったものを生み出していきました。そして、地域の方々とのやりとりを通して、その結論がこの地図の中にしっかりと反映されていると思います。危険箇所をきちんと示して、どこで災害の危険があるのか、犯罪、交通安全の観点からこういったところに危険があるのか、防災、防犯、交通安全を意識してしっかり示されております。こういった安心・安全ということだけではなく、地域の一員として子どもたちが成長することにも役立つのではないかと思います。それがひいては地域の強化へとつながっていくと思います。

ユネスコにおきましては、「ESD」、つまり持続可能な開発のための教育に力を入れておりまして、その一環として、防災教育にも力を入れております。今回のこのような取組みは、この防災のあり方にとって非常に有益な取組みであると思います。この内容についても日常生活に非常に身近、密接なもので、教室で受け身の講義を受けるのとは違い、子供たちが実際に外に出て行って実践的な取組みであると思います。その結果として、人々の生命を救うことのできる地図が出来上がり、それがさらなる地域社会強化につながっていくと理解しております。

そのようなことで我々、私も今回参加できたことを大変嬉しく思っております。あらためまして、入賞者の皆さま、そして主催者の皆さま、おめでとうございます。



「ぼうさい探検隊」の取組みは「他に例のない独特なもの、かつ革新的な防災教育へのアプローチ」とライヒ氏

審査総評

審査員長 室崎 益輝 氏（神戸大学名誉教授・兵庫県立大学防災教育センター長）

まず最初に、入賞・入選された皆さまに心からおめでとうと申し上げます。また、惜しくも入賞・入選には至らなかった2,200を超える、参加いただいたすべての作品を作られた皆さまに心からお礼を申し上げたいと思います。

今回は、マップコンクールを始めてちょうど11年目に当たります。11年目というのは、10年の節目を終えて、さらなる高い山に向かって再スタートする時だというふうに思います。その再スタートの1年目、ということで申し上げますと、とても素晴らしい作品をたくさん寄せていただきました。それはとても素晴らしいことだと思います。

今日は北海道の皆さまも来られています。北海道に大雪山という山があり、標高は2,290メートルです。今回応募いただいた作品を全部縦につなぐと、大雪山の高さになります。それだけ多くの作品が寄せられたということです。その一つ一つの作品の中にたくさんの小学生の思いがこもっている。それはとても高いだけではなくて、とても重いものだと思います。このコンクールは、入賞・入選された作品だけではなくて、多くの小学生の皆さまの思いがこもったその重み全体がとても素晴らしいことだというふうに思っています。私の気持ちは次に富士山（標高3,776メートル）を超えたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願ひします。

次に中身について一言申し上げます。少し難しい言葉で小学生の皆さんにはわかりにくいかもしれませんが、「画竜点睛」という言葉があります。竜の絵を描く絵師、言い換えると絵描きさんがいるのです。一生懸命尻尾を描いたり頭を描いたりして、とてもきれいな絵を描いていきます。でも最後に目の瞳をつけることによって、いきいきとその竜は飛び立つようなそういう力を得ることを、「画竜点睛」と言うのです。私は10年にして、画竜点睛というか、最後の、とても素晴らしい瞳というか、目が入ったというふうに思っています。今まで、その地域の中を歩き回って足を運んでいろいろなことを感じました。それから耳を澄まして多くのお父さんや周りの大人、先ほど、（入賞団体の児童から）「おっちゃん」とか「おじさん」という言葉もありましたけれども、その声を聞いて耳を澄まして聞いて、周りの人、あるいは、むしろ友達に、お兄さんや弟に手を差しのべて、素晴らしい作品を作った。だから手も動かし足も使い、目も耳もこらしてきました。でも最後に本当に心をそこに植えるということがとても重要で、今回は科学の心が入ったと思います。歩き回って時間を計る。津波がどこまで来たか、水がいつ、雨の日や晴れの日どこまで来たかということ調べる。ホイッスルの音がどこまで聞こえたかを調べる。まさにそれを大人の科学者以上に科学的な心がそこにあったと思います。そういう意味でいうと、「画竜点睛」というか、一つとても大切な心が、今年に入ったと思っています。

だから来年はいったい何を入れるのかというのはとても難しいのですが、世の中の進化には限りがありません。無限に成長していくので、来年はもっともっと、今度は輝くダイヤモンドのような目が入るかもしれないと思っています。とても素晴らしい目を入れていただいて、とてもありがたいなあと思っております。

先ほど申し上げましたように、一つ一つの作品に上下はないと思います。一つ一つの子どもの思いは、2,267の作品にすべて等しいと思います。その中で一つの作品だけを取り上げて申し上げますのは良くないことかと思いますが、あえて話をさせてください。先ほど相馬の「かもめクラブ」の作品が表彰されました。この3年間、なかなか被災地から作品が出てきませんでした。ところが今年は、岩手・宮城・福島から30団体の作品が出ました。これだけでも素晴らしいことです。その中で「かもめクラブ」の作品をご覧になったらおわかりになると思います。3年間の非常に苦しい復興の歩みを子供さんなりにしっかり見つめながら、歩みをしっかりとらえて、とても素晴らしいのは、こうあってほしい未来の提案というものがあります。その中には動物園とか遊園地だとか、公民館も欲しいという提案です。それはそういう子どもさんたちのその夢を、私たちが本当に復興の中で作るのが復興だと思います。復興とは何だろうかということは、まさにその夢を作ることだということを、「かもめクラブ」の小学生の皆さまが提案してくれた、とても嬉しい提案だと申し上げて、講評に代えさせていただきます。



「入賞・入選された作品だけではなくて、多くの小学生のみなさんの思いがこもったその重み全体がとても素晴らしい」と審査員長の室崎氏

第2部「防災教育フォーラム」

コーディネーター



むろさき よしてる
室崎 益輝氏

神戸大学名誉教授
兵庫県立大学防災教育センター長

パネリスト



あつみ ともひで
渥美 公秀氏

日本災害救援
ボランティアネットワーク
(NVNAD) 理事長



やまもと としや
山本 俊哉氏

明治大学
理工学部建築学科教授

ビデオ出演



ながい きよみ
永井 清美氏

福島県相馬市川原町
児童センター所長

進行



きはら ようこ
木原 要子氏

愛媛県愛南町立
福浦小学校校長
(2015年4月から愛媛県
愛南町立東海小学校校長)



ありさか
蟻坂 みどり氏

第1回マップコンクール
入賞者・大学生



みやた けいこ
宮田 敬子氏

フリーアナウンサー
東北放送
ラジオパーソナリティー

「子どもが主役の防災教育」の実践をテーマに防災の専門家や実践者をパネリストに迎え、「ぼうさい探検隊」のこれまでの10年を振り返り、防災教育の今後を展望するディスカッションを行った。

はじめに

宮田氏

今日はこのフォーラムにご来場いただきまして本当にありがとうございます。私は本日の進行を務めます、宮田敬子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私も4年前の3月11日、ここ仙台で「東日本大震災」にあいました。当時、私は3歳の娘をかかえて、それからおなかの中には、今は3歳になった息子がおりました。その子どもたちをかかえて水も電気もガスもない生活というのは本当に不安で、恐怖、それからいろいろなことを今でも忘れられずにあります。

今日は進行役として、そして2人の子どもの母として、これからどのように子どもたちとともに防災に向けて取組んでいくか、皆さまと一緒に考えていきたいと思います。

それでは、初めに皆さまにはこちらのVTRをご覧くださいと思います。



司会の宮田 敬子氏

VTR①「ぼうさい探検隊」とは（10年の振り返り）



ディスカッション①ぼうさい探検隊の10年

◆ディスカッション全体趣旨◆

宮田氏

「ぼうさい探検隊」の様子などを見ていただきました。それでは早速ディスカッションに入っていきます。まず最初に、コーディネーターの室崎先生から、今回のフォーラムの趣旨などについてお話をお願いします。

■これまでに「ぼうさい探検隊」が果たしてきた役割

室崎氏

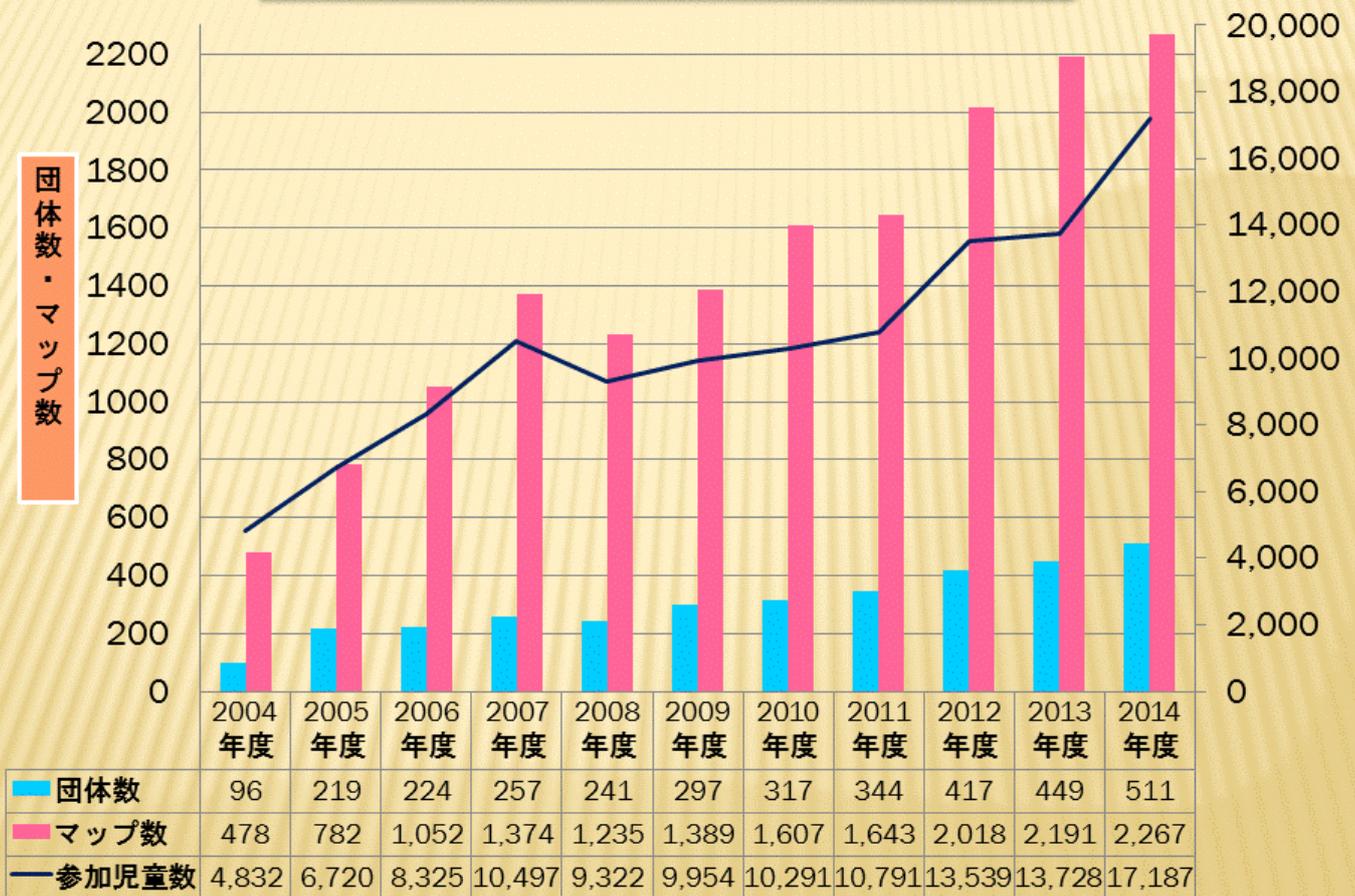
今は再スタートの時期だと思っています。今までの成果に安住してはいけないという気持ちがとても強いです。

10年前にマップ作りの取組みを始めたときは、今のよう非常に大きな力を持つとは、夢にも思いませんでした。子どもたちに現場（街なか）に出てもらって、現場の気づきというか、安全なところ、危険なことを知ってもらいたいという気持ちから始まった取組みです。



コーディネーターの室崎 益輝氏

ぼうさい探検隊マップコンクール参加申込数



室崎氏

(応募数について) 量的なデータによると、年々参加者や団体の数が広がっています。うなぎのぼりです。頭打ちがないです。ですから、先ほどの私の話(審査総評)の中で、「富士山を超える」というのは冗談ではないのです。必ずそれは超えるし、エベレストも超えるし、ひょっとしたら地球一周するような力を持つのだらうと思っています。

「ぼうさい探検隊」の取組みの教訓や意義を、しっかり振り返ることが必要
 そのうえで、さらに、この防災教育や「ぼうさい探検隊」の取組みをどう進めていったらいいのか今日は考えたい

室崎氏

それはいったいなぜなのかということだと思のです。だからもう一度、この10年間を振り返ってみて、マップコンクール、「ぼうさい探検隊」の取組みの教訓、意義というものを、いったんしっかり振り返ることが必要だと思います。

そのうえで、次の10年、さらに遠くの未来に向けて、さらに、この防災教育なり、この「ぼうさい探検隊」の取組みをどう進めていったらいいのかということをして今日は考えたいと思います。「過去」と「未来」と、さらには、「今まで」と「これから」というところを焦点に、皆さまと一緒に話し合いたいと思っています。

◆ぼうさい探検隊の原点◆

宮田氏

やはり、室崎先生、「ぼうさい探検隊」については、渥美さんにもお話を伺わないといけませんですね。

室崎氏

一番最初に、『マップコンクール、「ぼうさい探検隊」が大切だよ』ということをお私たちに教えていただいたのは渥美さんなので、ぜひその原点の思いを聞かせてください。

■阪神・淡路大震災時の被災体験を通じて

阪神・淡路大震災が取組みの最初のきっかけ

渥美氏

阪神・淡路大震災が発生した時に兵庫県の西宮市に住んでおりました、神戸大学の教員をやっておりました。大変な目にあっただということが取組みの最初のきっかけです。

もちろん、最初は救援ということが一番でした。今、写真をご覧ください。西宮市の安井町だと思えます。こういう状況の中で防災ということはなかなか思いつきませんでした。先ほど室崎先生からもお話がありましたとおり、東日本大震災発生後、3~4年経ってやっとマップが出てきた、ということだろうと思えます。今、映っている状況から防災ということはなかなか言えなかった。ところが住民の皆さまは、「防災をしなくていい」とは思っていないわけです。口では関西の人ですから「一生分、災害におうたさかいにもういらんわ」とおっしゃる方もいましたが、それは言葉の綾であって、やっぱり皆さま、特にお子さんを亡くされた方々などは、どうして救えなかったのだろうか自分を責めている方もたくさんいらっしゃいました。

我々もこういう場所（被災地）でボランティア活動をさせていただいていました。しかしながら、子どもたちは持っている言葉の数が少ないですから、我々に対してただただ見つめてくるだけだったりするわけです。そういう目で見つめられると、なんとかしないと、防災をしっかりとしていないとこれは大変なことになるということ、まざまざとひしひしとを感じるという場面がありました。

ただ、先ほど申しましたように、「では防災をしましょうか」と言っても、実際、大変な状況になったわけですし、「なんぼやってもあかんかったやないか」と言う人もおりました。

これをなんとかしなければいけないと思いました。人間誰しも、やろうと思っていることを誰かから「やったらどうか」と言われると嫌なものです。だから、皆さまは防災をやろうと思っはいるものの、そういう人たちに畳み掛けるように「防災をやりましょうか」と言ってもかえって逆効果ということもあります。



渥美 公秀氏



兵庫県西宮市安井町の被災の様子



被災地でのボランティア活動

■ぼうさい探検隊を立ち上げたときの趣旨

「防災と言わない防災」＝子どもと一緒に「街歩き」から始まった

渥美氏

そこで、地図を作って工夫してやってみたらどうか、ということを実験で思いつきました。これを、「防災と言わない防災」というふうに言いました。防災をやりたいからといって、「防災」、「防災」、「防災」と言うのではなくて、「街歩き」をやりますよ、ということから始まっていきました。まず防災はわからへんというなかで、「街の探検ですよ」と始めていくことで結果的に防災ができればいいという発想になっていきました。

その背後にあったものをもう一回お伝えしたいのですが、防災は意識ではないと思います。防災意識をすごく持っていて、防災をしなければ意味がないです。防災意識がすごく高くても、逃げなければ意味がないです。やらないといけません。行動が最初というところをまず考えているということ。それから防災はすごく大事だと皆さま思っておられるけれども、トップにはなっていない。今日の介護のほうが大事、今日の支払いのほうが大事。普通の生活はそうです。トップではないけれどもでも大事だということをどうやって見ていくか、ということなのです。

我々は日常生活を送っていますから、この中でみんなが興味あることを（やればいいのか）。誰も全員でなくてもいい、子育て中のお母さんにとってみれば、何に興味があるか。子どもです。それでは、子どもと一緒に防災をやってもらったらどうか。そんな発想から、大人と子どもと一緒にやろうということを考えていきました。防災と言わない防災、この「ぼうさい探検隊」、「ぼうさい」と言っていますけれども、「ぼうさい探検隊」のその心はというと、二重。今日たくさんかわいらしい子どもたちが出てくれました、子どもたちの学びがすごくたくさんあると思います。それが第一です。

その次に、それを支えてくださった指導者の方々、あるいはお父さん、お母さん、先生方です。これだけ子どもたちに地図をきれいに作ってもらおうと思うと、実はいっぱい準備しておられると思います。その準備しておられるお父さんお母さんたちのことが二番目の防災です。

この二重性が実は一番大事です。子どもも大人も知らないうちにできるというのが、この「防災と言わない防災」、「ぼうさい探検隊」のその心なのです。

ただ、これを西宮の片隅でやっておりました。先ほども損保協会の懐かしい方にお目にかかりました。損保協会の方に目を留めていただいて、気に留めていただいて、これをやってみないかと言ってくださった方がいらっしゃいます。そして広げていただくにあたって、さらにまた朝日新聞の方からも絶大なご支援をいただきました。—NPOが西宮で仮にいいことをやったとしても、いくらいいことを言ってもなかなか広がりにません。これだけ損保協会の皆さま方に広げていただき、朝日新聞で報じていただいたこと、これらをもってやっとここまで来たというような歴史を感じている次第です。

■ぼうさい探検隊のこの10年を振り返って（印象に残っている作品について）

宮田氏

これまで印象に残った作品や変化という点はありますか？

渥美氏

(マップコンクールの) 審査会に出席した時に、泣けてしまうマップがありました。神戸市の長田区の地図です。(阪神・淡路大震災による火災で) 燃えた地域を赤く塗ってあります。

宮田氏
渥美氏

映写画面の下の部分ですね。

これからの地図ではなく、過去のことを描いてあるのですが、これがコンクールに出されたときに、これを塗っているときに子どもたちがどう考えたかなと思い審査会で涙ぐんでしまったこともあります。

それからまた楽しいものもあります。沖縄の子どもたちの地図です。児童館で、小さい子も一緒にやっているのです。赤ちゃんも一緒にやっているのです。(フォーラム参加者から) 地図が見えづらいかもしれませんが、赤ちゃんも座らせて一緒に、あっちこっち歩いてきたところの写真を撮っているのですね。



兵庫県神戸市立御蔵小学校
「みくらトゥエンティ」マップ
第1回(2004年度)マップコンクール
審査員特別賞



沖縄県那覇市久場川児童館「いっぺいじょうとう」マップ
第8回(2011年度)マップコンクールわがまち再発見賞(日本災害救援ボランティアネットワーク賞)

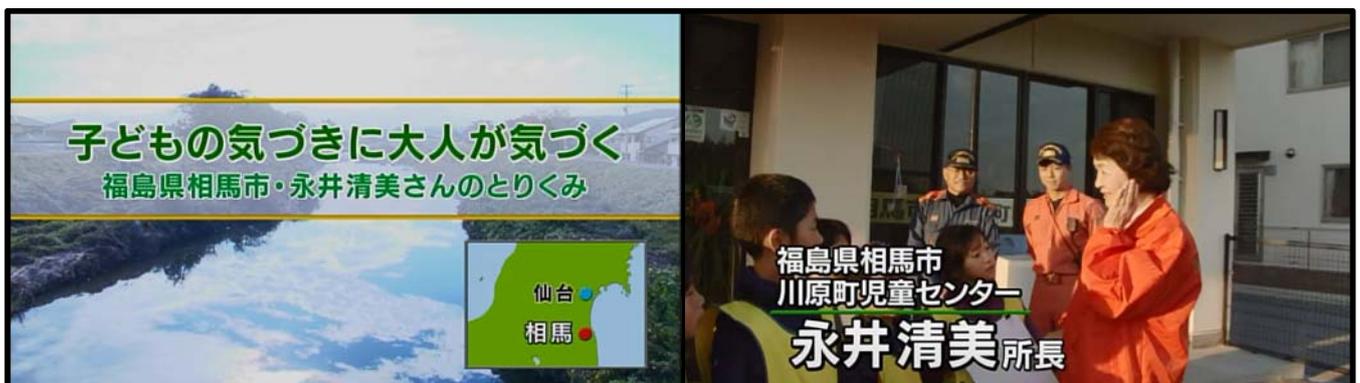
「いろいろな世代」と口では言うものの、赤ちゃんや小さい子からおじいちゃん、おばあちゃんまでみんな登場して街が大事だと訴えている。こういう地図が出てくると、ほほえましいなあと思いながら、私ども(日本災害救援ボランティアネットワーク)が賞を渡したのでした。一発で、これにしようと思つた、そういう思い出もあります。

◆「ぼうさい探検隊」実践の現場から◆

宮田氏

本当にいろいろな作品がこれまでの間で出てきているのだということ、それから(「ぼうさい探検隊」の)出発点についても話を伺いました。では実際に「ぼうさい探検隊」を実践している地域ではどのような取組みをしているのか、VTRでご覧いただけます。福島県相馬市、永井清美さんの実践、そして本日ご登壇もいただいています木原先生の愛媛県愛南町立福浦小学校の取組みをご覧ください。

VTR②「ぼうさい探検隊」実践の現場から
福島県相馬市 川原町児童センター / 愛媛県愛南町立 福浦小学校編





マップ作りのポイント
大切なのは子どもの気づき

(大人が)子どもの気づきに気づいてあげる



子どもの気づきに
行政が動いた!

以前はブロック塀 見通しが悪く 危ないと報告



子どもの気づきに
行政が動いた!

知事の耳に入り フェンスが改修されました



毎日が実践!そしていつも防災を
愛媛県愛南町・木原要子さんのとりくみ



愛媛県愛南町立 福浦小学校



愛媛県愛南町立 福浦小学校

木原要子 校長



▶ 防災訓練はいつも抜き打ちで



▶ 訓練の後は必ず“振り返り”

■学校を離れての活動／川原町児童センター 学校での防災教育との共通点と違う点

子どもの力を引き出すこと／地域とのつながりを大切にすること

室崎氏

皆さま、いかがでしたでしょうか。永井先生はむしろ学校を終えてからの課外活動、取組み、一方、木原先生は学校の中というか学校の授業の中での取組みという違いはあるものの、共通しているところもたくさんあると思います。

非常に印象に残ったのは、子どもを信頼している、子どもの力を引き出す、子どもが主人公だということをしかりお二方とも考えて取組んでおられること。もう一つは、やはり、地域に出て地域の中で考える、地域の人と一緒にいう地域とのつながりをとても大切にして進めていることも、素晴らしいと思いますね。

私の言ったことが違っているかもしれませんが、木原先生に一度しかりそのあたりのことも含め、ポイントを説明していただきたいと思います。防災の取組みのきっかけであるとか、そのようなことについてもお話しいただけますか。

■木原先生が防災教育に取組んだきっかけ

学校で取り組んだことが地域に返されるものとして考えたのが防災マップ

木原氏

7年前、平成20年度に勤めていた小学校が、地域ぐるみの学校防災の推進研究、1年間の研究の指定の拠点校ということになって、その時が本当に学校での防災教育の初めての取組みだったのです。

その時に、やはり学校でやるだけではなくて、なにか学校で取り組んだことが地域に返されるもの、その目玉としたいと考えた一つが、今持ってきている防災手帳です。これは子どもたちと全部作り上げたものなのです。もう一つが防災マップでした。これを作って、地域に返そうと考えました。

隣の高知県がたいへん近く、高知県が「ぼうさい探検隊」をやっているという情報をいただいて、それではそこでちょっと勉強してみよう、それがスタートだったのです。

■取組みの中で苦労したこと

室崎氏

それでは木原先生のお話も踏まえて、それから先ほどの永井さんの映像などを見て、渥美先生と山本先生、いかがでしょうか。何かコメントなどございましたら（お願いします）。

山本氏

（会場内で展示されていた愛南町立福浦小学校のマップについて）すごくよくできていますね。先ほど見させていただいたところ、津波浸水区域に要援護者の高齢者がどこに住んでいるのかが、よくわかるように描かれています。いろいろと苦労があったのではないですか？



木原 要子氏



山本 俊哉氏

木原氏

地域に探検に出て行った時に（気づいたことは）、本校のある地域に、高台に建物がないのです。ですから、地域のある家を目指して、ここに行けば津波から逃れることができるのではないか、避難する場所が地域の家だったりしたのですよ。そうしたら、そこがどれくらいの高さか知りたいなど。探検を続けていると、たまたま出会った方が建設会社の会長で、「先生、何しよるんぞなあ？」と（声をかけてくれた）。「ここは何メートルの高さがあるかっていうのを（調べるんやったら）若いもん連れて調べなさい。」という感じで。「トータルステーション」（測量機器の一つで、現在、あらゆる測量の現場で最もよく使用されているもの）とかいう、何かすごい専門的な建設会社が使うものを使って地域を全部調べてくださって。それから（その活動をスタートとして）地域とすべて手に手を取ってという活動になっております。



愛媛県愛南町立福浦小学校
「風の子ダイヤモンドズ」マップ
第11回（2014年度）マップコンクール
消防庁長官賞

■抜き打ち避難訓練の意義

室崎氏
渥美氏

渥美先生、ご意見、感想、質問でも結構です。

突然の訓練もやられているようですが、抜き打ち訓練は、子どもたちに最終的には「訓練」と言わないのですか？

木原氏

子どもたちには（訓練と）言います。言いますが、子どもたちには「学び」とも言います。抜き打ちですというのは、私は子どもに「ああしなさい、こうしなさい」と、たとえばマニュアルがあってもいけないからだと思います。その場で子どもが状況を判断して行動に移せる、その力を学校の中でしっかりと身につけさせたいと考えています。

失敗でいいのです。そのとき、そのとき失敗していいのです。失敗が学びになって、振り返った中で次の機会に活かせる。だから先生たちにも知らせません。

あるとき、子どもたちの行動はばっちりだったのに、先生方が大いに反省しなければいけないことも多々あったのです。それでOKなのです。それで、いざというときにどう判断してどう行動に移したらいいかということ、教師も子どももともに学んでいます。そのために、（訓練について事前に）何も知らせずに、私の判断でやっております。

室崎氏
宮田氏

宮田さん、いかがですか？今のお話を聞いていて。

あの避難訓練に私も自分が対応できるかどうか不安なのですが、その訓練を受けた子どもたちが大人になっていくというのは、地域にとってもものすごくプラスになるのではないですか？

室崎氏
木原氏

そうですね。机のないところでもやられるのですか？

たとえば先生たちが一番反省しなければいけなかったのは、子どもたちが登校して来て門から入ったかな、というところで緊急地震速報を鳴らしたのです。先生方は車で通勤してきたところだったり、駐車場で車から降りているところだったりとか、そのときに鳴らされたもので（とっさの行動が取れなかったのです）。

子どもたちには運動場で、（体が）丸くなる、ダンゴムシのポーズというのを教えているのですが、（素早く）ダンゴムシになっていてえらい。」、というふうに見ていたのです。そういうふうに雨だろうが雪が降ろうが、子どもがトイレに入っているときを狙ってやったときもありますので、学びです。

■中山小学校「おやじの会」と入賞団体との交流会を実施して

木原氏

素晴らしいなと思ったのは、お母さん方が熱心に学校行事に参加するということはよく聞きますけれども、ここ（仙台）は学校ではなくて、「おやじの会」（※）というのがある、お父さん方の力でずっとやってきているということを知ったことです。

防災マップも、2年間、同じところを同じように歩いてみて、ここも大きな揺れの被害があったところで、復興状況を去年と今年とマップにまとめて確認しあっている。そこで子どもたちが何を地域に発信できるかっていうことを、マップで表している。とても素晴らしい取組みを聞かせていただきました。

※仙台市立中山小学校「中山小おやじの会」

「防災教育フォーラム」の前日である2015年3月14日に、入賞9団体と「中山小おやじの会」の児童・保護者・指導者等による学習交流会を実施。各学校・団体の活動紹介や東日本大震災被災時の体験談等を通じて交流を深めた。



中山小学校「おやじの会」と入賞団体との交流会の様子

室崎氏

そういう意味でいろいろな形で裾野が広がっているということですね。

◆「ぼうさい探検隊」に参加して◆

宮田氏

そうですね。本当に子どもたちが、どんどんこういう経験をして大人になっていくのですけれども、「ぼうさい探検隊」も10年を超えているということで、第1回の「ぼうさい探検隊」マップコンクールに参加した方々というのは大人になっているわけですね。

今日は、宮城県石巻市立湊小学校で、第1回のコンクールに参加されて「ぼうさい探検隊賞」を受賞した蟻坂みどりさんに会場にお越しいただいています。蟻坂さん、どうぞ前にお願ひします。

蟻坂さんは、現在大学の3年生です。「ぼうさい探検隊」での活動をどのように感じているのか伺ってみたいと思います。室崎先生は第1回のコンクールの時から審査員長をされているのですものね。

室崎氏

でも、小さな子どもさんだったので、とても今の状況が想像できません。

宮田氏

では、蟻坂さんに少しお話を伺ってみたいのですけれども、今は大学生ということで。

蟻坂氏

今、仙台の大学に通っていて、3年生になりました。



蟻坂みどり氏

■小学生の時に探検隊活動に参加して感じたこと／探検してよかったところ

室崎氏

「ぼうさい探検隊」活動に参加した時のことは覚えておられますか？

蟻坂氏

全部が全部覚えているわけではないのですけれど、6割、7割、友達と協力した印象が強かったところは覚えています。

室崎氏

そうですね。一番友達とつながる、つながりができるということはとても大切なことだと思います。先ほど（蟻坂さんと）話をしていたら、入賞式のあとの懇親会のことや、表彰式のごことはよく覚えておられるということでしたけれども、「ぼうさい探検隊」に参加してよかったと思われたのはどのようなことですか？

マップを作ることによって子ども同士がつながる

蟻坂氏

私たちのときは6年生だけで（「ぼうさい探検隊」を）やりました。6年生ともなると、もうあまり遊ばなくなる友達とかも増えてくるのです。この防災マップを作ることによって、あまり関わりがなくなってきていた子ども、またつながれるし、しゃべれるし、一緒に行動できるし、それでまた低学年の頃のように、誰とでも昔のように仲良くなれたりしたこともありました。

■東日本大震災を体験して、探検隊活動がどう活かされたか

室崎氏

少々辛い質問なのですが、東日本大震災のときに、「ぼうさい探検隊」の活動は役に立ったのでしょうか。

東日本大震災被災時にマップ作りの経験が役立った点

蟻坂氏

防災マップを作ったときに、私たちの地区は井戸をマップに取り入れたので、震災のとき、実際にその井戸がどこにあるかということも頭の中に入っていました。また、私と一緒に活動した友達も、井戸がある場所を覚えていたので、実際、私の実家にも井戸がありまして、そこに水を汲みに来る人がとてもたくさんいました。

室崎氏

「三つ子の魂百までも」ということで、たぶんこの「ぼうさい探検隊」の取組みがずっと後々、まさに防災という面で役に立つということだと思います。渥美先生が、防災、防災と言わないけれども楽しんで、みんなと一緒にやっていることが後々防災に役立つ、防災は結果だとおっしゃっていたことがよくわかりますよね。どうもありがとうございます。

■これから災害に対し何をどう備えていこうと思っているか

室崎氏

これから災害、防災ということに対して、このようなことをしていきたいということでは何か考えておられることはありますか？

蟻坂氏

今、先生方の話を聞いて、木原先生の小学校の男の子の児童が、習慣というか、身につけて当たり前のようにしていかなければいけないという話は、私自身だったら、たぶん屋外で被災していたらきちんと動いていたかどうかがわからないと思います。外でどう行動すべきかなど、当たり前のように動けるよう、自分も対策しておかなければいけないと感じました。

宮田氏

本当に、どこでどのように災害にあうかわからないけれども、そういった時にこういうことをチェックしようとか、それはやはり、「ぼうさい探検隊」を経験しているからこそ、そのチェックポイントがわかったりするというところも、もしかしたらあるのかもしれない。

宮城県石巻市立湊小学校 はちまんあるある探検隊(6年)



石巻市立湊小学校

「はちまんあるある探検隊」マップ
第1回(2004年度)マップコンクール
ぼうさい探検隊賞(日本損害保険協会賞)
(蟻坂みどり氏が小学校時代に参加)

皆さま、今、会場に音楽が流れてきました。この流れている歌は、蟻坂さんの母校、湊小学校の校歌になります。石巻地区では、東日本大震災で閉校になったり統合されたりした小中学校が数多くあります。湊小学校も湊第二小学校と統合されました。

蟻坂さんのお父さまたちが中心となって働きかけ、日本オーケストラ連盟と日本作曲家協会の協力で、これらの学校の校歌がCDの形で記録されました。心、学校の校歌がよみがえる、「心のランドマーク」、こちらなのですね。このCDは人と防災未来センターや国会図書館、各県の図書館にも寄贈されたそうです。この場をお借りして紹介させていただきました。蟻坂さん、今日はありがとうございました。

室崎氏

やはり子どものころの思い出もありますし、校歌というのはなんとなく小中学校の空気感を思い起こさせるところがありますね。

記憶というのはいろいろな意味でとても大切だと思いますね。それと地域というか土地というか、生まれ育ったところとのつながりというのもとても大切で、それもある意味で防災の原点だと思います。

宮田氏

本当ですね。地域を愛して、それを思いだす気持ちというのも防災につながるのかもしれませんが。皆さまの学校の母校の校歌もこれをきっかけにちょっと思い浮かべていただけたらまたいいのかもしれませんが。

◆マップ作りのポイント／アドバイス◆

宮田氏

さて、それではここまで「ぼうさい探検隊」の実際の現場や体験談などをお聞きしてきました。ここで、これから実際にマップを作っていくためのポイントですとか、アドバイスを先生方にお伺いしていこうと思います。

私もここ仙台に住んでおまして、これからきっと、私の子どもたちもこの「ぼうさい探検隊」に参加していくのかな、というところがありまして、大いに参考にしたいなあという気持ちがあります。山本先生は防災まちづくりの専門家として、いかがでしょうか？

■受賞作品から伝わってくるメッセージ

山本氏

まずこちらのマップを見ていただきます。これは今年度の審査員特別賞を受賞した作品で、赤で描いてあるところが危険な場所です。先ほど室崎先生から科学の目が入ってきたとのお話がありましたが、まさにそれです。6か月間、朝の時間帯の交通量を調べているのですね。こんなに子どもたちが危険なのだということを子どもたちの視線でマップ化されています。その一方で（マップの）右側にずらりと並んでいるのが、地域で安全を守っている人たちで、危ないけれども一方でこういう人たちがいるのだということが、この地図からメッセージが伝わってくるのですね。



福井県小浜市立口名田小学校「口名田小学校4年生」マップ
第11回（2014年度）マップコンクール審査員特別賞

マップが、子どもたちと地域をつなぐコミュニケーションのツールになっている

山本氏

もう一つ次のマップをご覧ください。
これは2年前のものです。「本荘」（ほんじょう）とはどこかというのは後からわかったのですが、これも偶然、福井県だったのです。これもよくできていて、真ん中に黄色く塗られたところと水色で塗ったところ、これは水害で浸水した高さですが、膝までと、腰までと、子どもの視点で図化しています。その横に消火器や消火栓が並んでいますね。そこに人の顔写真も載っています。この人たちは地域で安全を守っている消防団、消防署、それから駐在所、それから見守り隊です。そしてここから、「いつもありがとう」というメッセージが伝わってきますね。

つまり、このマップが、子どもたちと地域をつないでいくコミュニケーションのツールになっています。防災はリスクコミュニケーションが重要とよく言いますが、その点でこれはなかなか素晴らしいと思いました。

■子どもの視線でないと気づかないポイント

宮田氏

こうやって地図を描いたり実際に読んだりというのは子どもたちにとって一番いい勉強の方法になるのかなという感じもします。今度は、木原先生にお伺いします。実践する現場として、地図作りで大切にしているものはありますか？

木原氏

永井先生のVTRの中にもありましたとおり、やはり子どもの気づき。大人の目で（地域を）一回、周るのです、子どもたちを探検に出させる前に。その気づきとやはり子どもたちの気づきとはずれていることもたくさんあるのです。「こんなところまで気がつくか！？」ということがあるので、子どもがこういうことに気づいたのだということのを逃さない、取り上げてあげる、そういうふうな力量をやっぱり指導者の方は持たなければいけないと思います。

■地域の人たちとの連携の大切さ

宮田氏

地域の人たちとの連携というのも、子どもたちにとっては初めてだったこともあるのではないですか？



福井県あわら市本荘（ほんじょう）小学校
「本荘ガールズ8」マップ
第9回（2012年度）マップコンクール審査員特別賞

マップが果たす役割

木原氏

この活動、子どもたちは大好きなのです。なぜ大好きかというと、自分たちの知らないことが、どんどん、どんどん地域の人と関わる中でわかっていくからです。だから、この防災マップは、ただ単にハザードマップというものではなくて、地域とのコミュニケーションにすごく大きな役割を果たしているものだととらえています。

子どもたちは地域の人との関わりが大好きですし、子どもたちがそういうふうにと動くと、「いかな、先生。大人ももっと頑張らないかな。」と地域の方々が言い始めました。先ほど意識の話がありましたけれども、「思いだけだったらいかな、子どものように行動に移さないといけないときに来ているな」、ということを知ったりして。子どもが、「やったあ」と言っています。

■防災マップは活かしてこそ、価値がある／日々変わる「まち」を見ることが大切

宮田氏

そういうのを全部注ぎ込むので、マップからは愛情やいろいろなものが感じられるのかなという気がします。渥美先生は皆さまの意見を聞いていかがですか？

子どもたちのマップ作り・まち歩きが地域にとって刺激に

渥美氏

大変大事なことを言っていたと思いますね。地域との関わり、言葉で言うとそうなりますけれども、実際には子どもたちがマップを作ってその辺を歩いてくれている、それは地域の方には刺激になりますよね。

マップ自体は、作っていると段々何のマップかわからなくなってくると思うのです。それでいいと思います。そうなったらむしろ成功で、防災だったはずなのに地域のオモロイおっちゃんを描いていると。そうなってくるほど面白いし。それをどう加工するかはまたテクニックの問題だと思います。

■これからのマップ作りに大切なこと

宮田氏

室崎先生から、アドバイスをいただけますか？

先生や学校が変わると子どもが変わる／子どもが変わると親が変わる／親が変わると地域が変わる

室崎氏

今のお二方の話を聞いていて、いつもよく使う言葉なのですけれども、一番最初に、「校長先生が変われば学校が変わる」。木原先生のような先生のことを言っているのです。「学校が変わる、学校の先生方が変わると子どもが変わる」のです。「子どもが変われば親が変わる」のです。「親が変わったら地域が変わる」のです。

重要なことは、地域全体が子どもを中心にこういう取組みをするという、そのつながりがとても大切だということ。まさにそういう意味で、単にハザードマップを作るのではなくて、地域の人とのつながりをつくっているのだと思うので、とても大切なことです。

宮田氏

本当に、防災以上に子どもたちには、いろいろなことを体験してもらいながらマップを作っていたらいいと思うのです。

◆広がる「ぼうさいの輪」◆

宮田氏

この「ぼうさい探検隊」ですが、2004年の第1回の応募総数は478点でした。そして今年の応募総数が2,267点、参加した児童の数は延べ11万人を超えまして、大きな広がりを見せています。

この広がりの一つとして、特別支援学校の皆さまの取組みがあるのです。

今画面でご覧いただいているのは、東京都立城南特別支援学校、城南すずらんグループが作ったマップです。この、「車いすから見た多摩川の洪水」、こちらは第10回の審査員特別賞を受賞しました。学校の近くを流れる多摩川流域の水害での危険をテーマに選んで、車いすの子どもたちが街なか探検を行って作ったものなのです。マップ作りはもちろんですけれども、車いすの子どもたちが地域の中で生活しているということを地域の方々にも知ってもらうということにもつながったそうです。



東京都立城南特別支援学校
「城南すずらんグループ」マップ
(第10回(2013年度)審査員特別賞)

さらに海外の広がりもありまして、「愛媛県西条市の防災教育をベトナムの子どもたちへ」という取組みです。毎年、風水害で悩まされているベトナム社会主義共和国のフエ市というところがありまして、台風の被害もあった西条市の皆さまがこちらを訪れまして、同様に、子どもたちと一緒に現地でタウンウォッチングをしてマップ作りを行ってその成果を発表する活動も報告されています。どの子どもたちもいきいきとした表情が魅力的ですね。こちらの地域では体験学習というのは少ないということで、やはりいきいきと取り組んでいたそうです。



フエ市での取組の写真

さらに今ご覧いただいているのは、今年の1月に行われた防災サミット、「防災世界子ども会議2015」の様態です。海外の子どもたちが防災マップ作りに取り組んでいるのです。いろいろな国の子どもたちが集まって作っているところもあります。自然災害はいつどこで起こるかわかりませんので、まさに防災は世界共通の課題として取組みが広がっています。この防災世界子ども会議というの、ずっとつながってほしいなという取組みの一つですね。



「防災世界子ども会議2015」の様子

ディスカッション②これからの「防災教育」の課題

◆ディスカッション①をまとめて◆

宮田氏

ここまでは「ぼうさい探検隊」の10年を振り返りながら実践のポイント、今後のアドバイス、広がりなどについて話し合ってきました。これまでの総括、それからこの先どのように話を進めていくべきなのか、室崎先生からお願いできますか？

「ぼうさい探検隊」によって地域の横のつながりと世代の縦のつながりをつくる／これにより安全な社会の基礎をつくる

室崎氏

先ほども富士山の話をしましたけれども、もっともっと広がりを大きくしていく。なぜそういうことを言うかということ、本当に日本の社会全体が安全にならないといけないと思うのですよね。

そうすると、やはりあらゆる地域、あらゆる所からこういう提案がどんどん、どんどん出てくるようにできないのかなあということですよ。それが一番大切なことだと思いますし、私の思いの一つは、今日も、蟻坂さんに来ていただいたように、同窓会みたいなことをしたいなあということ。中学生、高校生、大学生にもつながりを広げたい。小学生がこんなに素晴らしいのに、大学生はもっと素晴らしいことができるはずだという、そういうつながりですよ。地域の横のつながりと、世代の縦のつながりをつくって、本当に安全な社会を作る基礎を作りたいと思います。

◆防災まちづくりの専門家の視点から◆

宮田氏

本当に「ぼうさい探検隊」を今度は一歩進めて防災教育というところまで考えていきたいと思っています。この先の議論についても室崎先生から今後の防災教育という点でお話を進めていただけますか？

室崎氏

これからどうあるべきか、ということについて、まずは専門家である山本さんが今、素晴らしい取組みを、いろいろなところでやられていますので、少し提案をいただければと思います。

「逃げ地図」（避難の目標のポイントまでの時間と経路を色塗りした地図）とは

山本氏

「逃げ地図」という取組みを進めております。「避難地形時間地図」とも言いまして、津波からの逃げ地図を基本にしています。東日本大震災の（被災地である）ここ宮城県から岩手県陸前高田へずっと広がっていった方法で、避難の目標のポイントまでの時間と経路を色塗りした地図です。

これは、革ひもと色鉛筆と地図、ハザードマップなどがあれば、どこでもできます。この「ひも」は、3分間の距離（の物差し）です。今、画面で映っていますね。足の悪い高齢者が斜路を歩く速度が1分間に平均43メートル。3分間で129メートルです。緑色、黄緑、橙、赤と、3分ごとに色を変えて表示します。どこまで逃げるかは、ハザードマップの想定浸水区域を参照し、被災地ですと、過去最大の津波の遡上ラインを参照して、避難目標ポイントを決めます。

一目で安全な避難場所までの経路や避難時間の把握が可能に

山本氏

この地図の特徴は、一目で安全な避難場所までの避難時間がわかること、どの経路を通ったらいいのかが見えること、避難者の視点に立ったりスクの可視化です。

もう1つの特徴は、新たに避難場所や避難経路をつくと、色が変わることです。この地図は鎌倉（での取組み）です。対策をとると、避難場所がどうなるか分かります。短くなったということは、良くなったということですから、やる気が出てくるわけですね。



山本 俊哉氏

**逃げ地図は、東日本大震災の経験から生まれた手法
目標避難地点までの時間と経路を色塗った地図**

「逃げ地図」 目標避難地点までの
時間を経路を色塗った地図

防災マップやハザードマップ等をもとに目標避難地点を設定

3分間で安全エリアまで避難
できる範囲の道路に色塗る

革ひもを物差しに
して色塗り

高齢者が傾
斜路を歩く
速度43m/
分

避難目標ポイントへの距離

想定上安全な避難場所までの避難時間が一目で分かる。
最も近い避難場所への避難方向も分かる
⇒避難者の視点に立ったりスクの可視化

新たに避難場所や避難経路をつくと色が変わる！
⇒対策の効果の検証、やる気の向上

避難時間・方向を示す（気仙沼市本吉町） 避難対策による改善効果を示す（鎌倉市材木座地区）

■ハザードマップなどの情報と自身の居場所などを組み合わせる意義

山本氏

逃げ地図づくりは、中学生以上でないと思われてきましたが、小学生も、5、6年生であればできるということがこの間やってみてわかりました。先ほど室崎先生から、校長先生が変わると地域が変わるという話があったとおり、逃げ地図づくりも学校が取り組むと、地域に影響を与えます。

これは陸前高田の逃げ地図です。中学生たちが、がけ崩れの危険性もあると指摘するわけですね。津波からの逃げ地図ですが、その後、土砂災害の危険性の点検が行われました。これは伊豆の下田です。ここに写真があります。東日本大震災の後、下田市では住民が自ら緊急の避難場所を検証して、自分たちで避難階段を作りました。ところが隣にがけ崩れの危険個所の表示があつて、地震で崩れるかもしれない。どうしたかという、そこがもしもダメになったときに別の避難場所に行くには何分になるのかを示したものです。これも中学生たちの指摘が契機になりました。

逃げ地図は、どこまで逃げるか、どこは逃げられないか、設定の条件を自在に変えられます。中学生たちの取組みを契機に、地域の人たちが集まって、それぞれでチームをわけて作ったのです。少し見にくいのですが、ここに×印があります。これが土砂崩れで行けなくなったところ。地震時は道路が閉鎖してしまつて行けないことがあります。避難時間を短くするにはどうするか対策を考える機会になります。

小学校での取組みに大学院生が参加

山本氏

最後の写真は、河津桜で有名な伊豆の河津町です。河津町の小学校で保護者が集まって家庭学級で（逃げ地図づくりを）やってみたらこれ面白いと。小学校でもやろうよということになって、大学院生たちが教材を作ったのです。そうしたところ、見事によくわかるものができたのです。やはり子どもたちのエネルギーはすごいし、大学の教育の一環でやっているのですけれど、大学院生も育っていく。こういうものも一つのバージョンとして入れていけるといいかなと思います。

「逃げ地図」による各地域での取組み、活用方法

岩手県陸前高田市、神奈川県鎌倉市、静岡県下田市などで

中学生たちの逃げ地図づくりから地域住民の取組みへ
津波からの避難から**土砂災害なども考慮した避難へ**



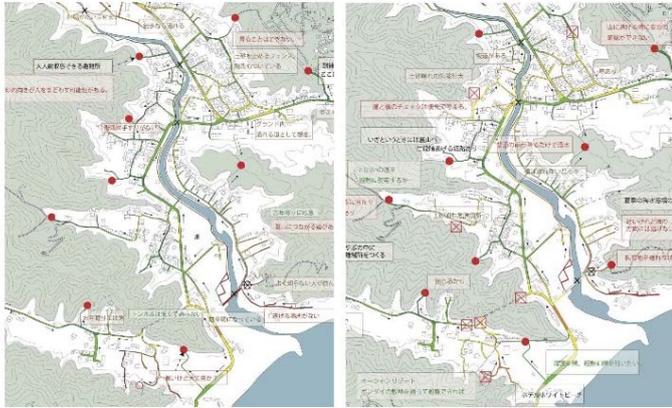
逃げ地図→自主防災組織が指定した緊急避難場所の検証
崖崩れの危険の指摘→土砂災害も考慮した逃げ地図も作成
そうした指摘は、中学生の逃げ地図作成や発言から。



逃げ地図は、自在に設定条件を変えられる。

左：土砂災害なし

右：土砂災害で通行止あり



「逃げ地図」による各地域での取組み、活用方法

作り方 3ステップ ①「逃げられる場所」を探す ②「逃げられる場所」から色をぬっていく ③話し合う

1 「逃げられる場所」を探す

黄色い等高線の上の逃げられる場所にシールを貼ります。

■シールのしゅりい

- 青→安全なところ
- 赤→危ないしや地を含むところ
- 黒→新しい逃げ場

2 「逃げられる場所」から色をぬっていく

②-1 「逃げられる場所」から道にそって、ひもをあてます

②-2 ひもにそって、緑色から順番にぬっていきます

色ぬりの順番： →

②-3 色ぬりを終わったら、逃げる方向にそって矢印がきます

*歩行者の歩行速度の設定について
おじいちゃん、おばあちゃんを設定して、歩行速度は43m/分と設定しました。

3 話し合う

逃げ地図を作るなかで、気づいたことや安全について考えたこと、グループのみんなと話し合います。

話し合いが終わったら、グループでまともシートを書きましょう！

河津町立南小で使った逃げ地図ガイド

室崎氏
木原氏

渥美さん、木原さん、今の山本先生のお話を聞かれていますか。

すごく興味があります。私は、地方でこつこつやっているだけなのです。高齢者が本当に逃げられるかどうかという、子どもたちの気づきから、高齢者グッズを身につけて、おもりをつけて、杖をついて避難経路を歩いてみて何分かかる、これでは逃げられないということを知りたいのですが、山本先生の取組みはすごくいいですね。また勉強させてください。本当に共感しました。

室崎氏
渥美氏

渥美先生、いかがでしょうか。

まったくそのとおりです。地図というのはいろいろな発展形、応用形があるということで、マップコンクールも、今一つの方向を向いているような感じがします。もっと多様な地図ということを考えて、今、山本先生が説明された、掘り下げた地図というのがあってもいいかな、という思いで拝見しました。

室崎氏

課題意識というか、目的意識みたいなものをどんどんクリアにして、それに伴って地図作りの技術もどんどん進化していくということだと思えるのです。このコンクール、最初はみんな本当に歩いてみて、「ここに消火栓あるよ」と絵を描いただけだったものが、今ではどんどん進化してきていて、山本さんには、さらに次の方向性を示していただいたのかなと思います。どうもありがとうございました。

◆これからの災害に備えて◆

室崎氏

それでは、これからの災害に備えてということで、まさにこれから、とても大変な時代、多難な時代を迎えようとしています。そういうことも踏まえて、これからの取組みとして、どうということを考えて進めていったらいいのかというお話を、まず渥美先生から伺いたいと思います。



ディスカッションに熱心に耳を傾ける参加者の皆さま

■東日本大震災の後、変わったこと

渥美氏

まとまった話ではないのですが、やはり東日本大震災を経験いたしましてから、津波はかなり意識されるようになりました。それから、原子力発電所の問題がございます。一方で、毎年発生する水害ということもありますし、火災もあれば、もちろん地震もあります。そういう多様な災害に備えなければいけないということ、あらためて考えるべきだと思います。

■これからの課題（教育現場、マップ作り等の実践者という立場から）

それからそういうことに対して、先ほども言いましたが、意識をいくら高めても、行動しないと意味がないということ、あの手この手でやるしかないということです。

身近な、一人一人の生活に目を向けた防災が必要

そのための1つのツールとして地図というのがあります。よく地域に応じた防災をすべきだということも言われるのですが、そう堅苦しく考えなくても、自分の街に住んでいる犬の名前は何か、そのようなものでもいいと思います。非常に身近な、一人一人の生活に目を向けたような防災が必要になるだろうなというふうには思っています。

それらに共通する点として2点だけ申し上げます。

1つ目は、専門家が何かを教えるという防災ではないだろうなと思います。

2つ目は、「自助、自分の身は自分で守る」ということも、よくよく考えると、そうか？ということも考えてみてほしいと思います。他人がいるから自分の身も守らなければいけないのではないかな、誰かのために、と思うこと、共助が先ではないかということも考えてみてほしいかなと思います。

あまり、自分が生き残ろう、自分だ、自分だと、自分の意識がどうだとか、そういうと少々辛いような気がするので、そうではなくてみんなで犬の名前ぐらいから始まって、いろんな災害に備えましょう、というのがこれからのスタイルかなというふうに思います。

室崎氏

専門家が教えてくれるのではなくて現場が教えてくれるということかもしれませんね。

■学校現場の指導者として

室崎氏

木原先生いかがでしょうか。

木原氏

防災教育に取り組んできて、「すごい！」と思うのは、子どもたちが人に対して優しくなることです。自分自身も強くなります。自分のことと同じように、隣にいる友達のこと、相手のことを考えられるような子どもに育てているなど、すごく感じています。

室崎氏

優しくなるってとても素晴らしいことですよね。防災の一番原点ですよ。渥美さんも言われたとおり、共助からというよりも、友達や家族の命も守りたいという気持ちが、防災の原点だと思います。

◆これからの「ぼうさい探検隊」・防災教育のあり方とは◆

室崎氏

では、この先「ぼうさい探検隊」をどう進めていったらいいのか、少しこれからの防災教育のあり方についてお話をさせていただきたいと思います。まず渥美先生から、これからの防災教育のあり方についてお話を伺いたいと思います。

渥美氏

噂に聞くとところによると、今度から学校教育の中に安全マップ作りがあるということなので、木原先生からお話いただければいかがでしょうか。



パネリストから熱心な発言が続いた

2015年度から小学校3・4年生の社会科教科書に「地域安全マップ作り」が記載される

木原氏

これまでマップ作りというのは、各学校のそれぞれの創意によって、社会科の時間だったり総合的な学習の時間だったり、いろいろ工夫してやってきました。この4月から使われる新しい3、4年生の社会科の教科書の中で「安全マップを作りましょう」というのは、どの出版社にも載っているのです。これだけきちんと書いてあると、やはりカリキュラムの中に入れなければいけませんし、これはすごいことになるのではと思っています。

室崎氏

渥美先生、補足をお願いします。

渥美氏

正に、子どもたちにとってほとんどの時間を学校で過ごすとなれば、学校教育の中にきちんと取り入れるということも、これからの防災教育のあり方だとは思いますが。



教科書を掲げる木原 要子氏

■ぼうさい探検隊の課題 広がりを見せた今、大人がやるべきこと

「ぼうさい探検隊」と学校教育等との連動

渥美氏

それから、こういう民間で始まったマップ作りというのも、古いものとかいっぱい探してもらって、古い地図も見せてもらいましたが、どうでしょうか、我々は、賞を渡して終わっているという気がしないでもないです。

これまでのマップ、見れば懐かしいです。どこにいったら手に入るかというと、意外とホームページとか、そのようなところになるのです。マップ集みたいな本を出してみてもいいのではないのでしょうか。画集のような。いろいろな人が手に取って見ることができればいいかなと。

そして、学校教育と連動させてみるというのも一つの方法かなと思います。マップは、小学校の何年生かにならないと、何を描いたのかわかっていない学年の子もいると思います。私もときどきわからないことがあります。地図に表すということについても、発達段階に合わせて上手く考えないといけないと思いますので、それに応じたサブ教材のように、これまでの10年間の蓄積を使えるのではないかと思います。

室崎氏

山本先生いかがでしょうか。今までの教科書の話につきまして。

学校での取組みが連続的に地域の取組みにつながっていくことが重要

山本氏

とてもいいことだと思うのですが、学校の先生は準備で大変だなと思うのです。これはやはり、地域の人たちに協力してもらって、負担をシェアしていったほうがいいと思います。

それともう一つは、授業でやったものが地域の取組みにつながっていくということ。単発ではなく連続的に。そういう視点で取り組んだほうがいいと思いますね。

室崎氏

1つの種をまくことで、そこから耕して芽を伸ばすのは地域の仕事だと、そういう関係ですよね。ですから、できるだけ地域の方と一緒に取り組めるような取り組み方を各学校でしていただけると、とてもいいだろうと思っています。

■地域に根付いた「防災教育」を実践することの重要性

室崎氏

ここまで進んできたのかという話を聞いていると、（応募数が）先ほどの富士山どころではなくて、来年1万点も出てきたら審査をどうするのだろうか、ちょっとそれが悩みの種ですけれども、それも嬉しい悲鳴ですね、何万点も出てくるというような事態になるのかもしれないけれども。

コンクールに出すことが目的ではないので、やっぱりそれぞれの子どもたちが、しっかりいろんな地域を自分たちの目で見たり、見るだけではなくて地域の人たちの命をどうやって守っていくかということを考えて答えを出していく、そういう取組みが広がっていくのはとてもいいのかなと思います。

そういうことで、これからの「ぼうさい探検隊」を、しっかり発展させていかないといけないし、少し後ろから応援するような役割を、このマップコンクールというか、私たちが果たしていければと思っています。

宮田氏

そうですね。先ほどから本当に、私が個人的に感想として思っていたのは、マップをこういったコンクールに出すというだけではなく、マップを見なければいけないのは、実は作ったのは子どもたちではありますが、保護者であったりその地域の方々であったりというところを強く感じます。

先ほど渥美先生から、冊子にしてみてもどうかというような声がありましたけれども、そういった保護者や地域の方々に対するフィードバックという形で、何か現在されていることはあるのですか？

地域へのフィードバック（地域にマップを配布／マップ作りの様子の紹介など）

木原氏

マップは模造紙1枚で大きいです。技術というものを地方の人間なので何もわからなかったもので、パソコンに落とした地図に、スキャナで取り込んだ子どもたちのマップの1つずつをパーツとして張り付けて地図にし、各家庭に、地域ごとに配って、その裏には「こういうふうにご利用してください」といった子どもたちの活用方法のメッセージをつけて返しています。

ただ、私が勤めている学校で大切にしてきたのは、マップを作ったということや、その出来上がったマップをいろいろなところで説明しただけでなく、そのマップ作りに至るまでの「街なか探検」の様子を全部写真にまとめて、それを学習発表会や、地域の人たちが喜んで来てくれる学芸会といったところで、マップ作りを紹介する時間を設けていることです。

木原氏

今年度は全校児童、低、中、高学年にわかれて作りました。先ほど言われていたように、1年生には難しいですよ。地図を持って動かしても自分がどこにいるかわからないのですから。だけれども、自分の家があるからその周辺はどうなっている？というような簡単なものから、それを絵地図に表すことから始めるなど、1年生でもそういうことから取り組んでいます。本当にその過程を家族や地域の方に知ってもらいたいとの思いで、マップの発表会を必ず行うようにしています。

■小学生から中学生、そして大人へとタテの
広がりによる更なる充実



当日は満席となった会場

宮田氏

そうですね。そうして育っていくと。先ほど山本先生の逃げ地図、中学生も取り組んでいたということですが、地図が進化していく過程というのもすごく大切なのかなという感じがしますね。

山本氏

そうですね。陸前高田で最初に中学生が描いた後、次は消防団が来てその地図を修正していきました。3回目は漁協の女性部が来て意見を加えて、地図の情報がどんどん積み重なっていくのです。そこで共通して見えてくるものがあります。

だから、やはり地図を作るのが目的ではなくて、情報をシェアしていった対策をどういふふうを考えていくのか（ということが重要）。まだ復興は途中なのですが、今どのような事業が行われているのかということと共有しながら、そういう中で、災害が起きたときどうしたらいいのかを考えるという、まさにコミュニケーションのツールとして展開できるというふうな、可能性があるというふうに私は見ております。

宮田氏

室崎先生、本当に世代ごとによって着眼点というのは全然違って、そういうものも防災にとってはかなり重要なことですね。

マップづくりによって世代を超えたつながりを実現

室崎氏

世代を超えて教え合うという、子どもの気づきに大人が気づくという、永井先生のメッセージ、そういう部分もあるけれど、逆に言うと、大人の動きに子どもが学ぶということも当然ある。

子ども同士でも、お兄さんお姉さんから下の子が学ぶ、あるいは下の子に上の子が学ぶ、そういう世代を超えた学び合いみたいなものをこのマップを軸にしながら。マップを作るときに、グループによって大学生が手伝いに入る、大学院生が入っているという先ほどの話と同じですよ。大学生がお手伝いに入っているところもずいぶんあるし、先ほど、沖縄で赤ちゃんと一緒に動いている、動いているという表現はわかりにくいですが、幼稚園児が小学生と一緒にやっているのが多いですよ。そういう、いろいろな世代を超えたつながりが生まれてきているというのは、とても素晴らしいと思います。

宮田氏

渥美先生、やはりこうして世代を超えてつながることができるのも、「ぼうさい探検隊」が渥美先生の活動をきっかけに生まれて、10年ずっと積み重ねてきたということもありますね。

渥美氏

こうやって続けていただけるとは本当に思わなかったですね。最初に、損保協会に声をかけていただいて、5年くらい続くかなと思っていたのですが、地図にも圧倒されるし、組織的にきちんと動いていただけるということにも心を強くしました。それに応えるかのようになんていい地図が出てくるという相乗効果でここまで続けていただけたということに感謝しています。

総括／提言（メッセージ）～閉会挨拶～閉会

宮田氏

今日の話し合いを通して、次の年からまたグレードアップした地図が登場してくるのかなと思います。パネリストの皆さま、コーディネーターを務めていただいた室崎先生ありがとうございました。

フォーラムの最後に、提言・メッセージとしまして、先生方から皆さまに一言、今日のフォーラムを通して感じたこと、それから伝えたいことを書いていただきたいと思います。教育現場にいらっしゃる方々、それから未来を作っていく子どもたちへ（の提言・メッセージ）でも結構です。

室崎氏

宮田さんもぜひ。先ほど（宮田さんも）お母さんだということに初めて気づきました。

宮田氏

そうです、母です。

室崎氏

お母さんという面もあると思いますので、宮田さんもぜひ書いていただければありがたいと思います。

宮田氏

書かせていただきます。皆さまも今日のフォーラムを通して、ああこのようなことがあったな、気づきがあったな、と思ったら思い描いていただけたらと思います。

さて、一番最初にペンを置かれた山本さん、いかがでしょうか。

山本氏

「世代を超えて、分野を超えて」。

「世代を超えて」は、たぶん誰かが書くのではと思っていました。子どもだけではなくて高齢者も。それに加えて、現世代とそれから未来の世代ということもあります。

「分野を超えて」。私たち専門家、大人の社会もそうなのですが、どうしてもそれぞれの分野があります。領域があります。縄張りがあります。教えるときにはその分野をきちっと教えようとする、深堀してしまう場合があります。今求められているのは「分野を超える」ということかなと思っています。

そういう点では、「ぼうさい探検隊」の「さい」は災難とすると、交通安全、事故など、いろいろな分野が入ってくると思うので、そういう許容していくというような寛容な気持ちが大事だと思っています。

提言（メッセージ）
「世代を超えて、分野を超えて」



宮田氏
木原氏

続きまして、木原先生もお願いします。
はい。「つなぐ」。

今ここで学んだ学びを始め、防災教育、マップ作りもそうなのですが、復興への願いや思いや、いろいろなものをつないでいかなければいけない、そうすることで大切な命もつないでいけるのではないかなと思いました。だから「つなぐ」という言葉をイメージしてみました。

提言（メッセージ）
「つなぐ」



宮田氏
渥美氏

「つなぐ」というのは本当にいろんなところに繋がっていく言葉ですね。
渥美先生もお願いします。

パズルみたいにしておきました。「生」きるという字が一番これからの防災教育で大切だろうと。

これからも以前からも大切だろうと思いますけれども、防災についていろんなことを考えているときに、それは「人生」のことを語っているのか、「生命」のことを語っているのか、「生活」のことを語っているのか、共に生きるという意味での「共生」のことを語っているのか、ときどきずれている場合があるので、全部やらなければいけないのですが、お互いにこういうことを確認しながら防災を考えていけばいいなと思います。

どの言葉も、一人で、ということはありません。生命にいたっても一人の命なんてありません。他人とともにある命、二人以上で考えるべきだろうということをおっしゃっています。

提言（メッセージ）
共
人生命
活



宮田氏

私は、「手をつないで子どもと町を歩こう！」と書かせていただきました。

皆さま、最近お子さんとまちを歩いていますか？宮城県も車社会なので、ちょっとした距離でも車で移動してしまうのですね。おそらく子どもたちの方が近所のことを知っています。一人で歩いては寂しいですから、子どもに手を引かれながら、子どもたちが知っていることを理解していく、子どもたちに教えてもらう、それが家庭のなかの災害意識というのを育てていくのではないのかな。

「世代を超えて」、「共」に、というキーワードが出てきましたけれども、そのきっかけに、子どもの意見もあって、それをまず一番小さい単位の家で実践していきたいなとすごく思いました。

提言（メッセージ）

「手をつないで子どもと町を歩こう！」



宮田氏
室崎氏

では、室崎先生もお願いします。

「未来の安心は、子供とともに取りくむ探検隊から」。

このメッセージは大人に向けてのメッセージなのです。子どもは、防災マップ作りや「ぼうさい探検隊」の大切さは肌で感じてしっかりわかっていると思うのです。わかっていないのは親なので、だから子どもを出しにして、子どもと一緒に「ぼうさい探検隊」活動、つまり、親子の「ぼうさい探検隊」という仕組みをぜひ具体化したいと思います。

提言（メッセージ）

「未来の安心は、子供とともに
取りくむ探検隊から」



宮田氏

本当にそうですね。室崎先生から、今日のフォーラムを総括して最後に一言いただきたいと思えます。

室崎氏

まとめることは特になくと思います。子どもたちと一緒に頑張りますので、皆さまも一緒にこの「ぼうさい探検隊」あるいはマップコンクールが、もっともっと広がるように一緒に力を合わせていただければありがたいと思います。今日はどうもありがとうございました。



熱気あふれる中、
パネルディスカッションは終了した

防災教育フォーラムの閉会にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。本日お集まりの皆さまには、日ごろから防災教育の推進にご尽力をいただき、深く感謝をいたします。また、本日「第11回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」で受賞された皆さま、誠におめでとうございます。本フォーラムが国連防災世界会議のパブリック・フォーラムとして、東日本大震災の被災地である宮城県仙台市で開催されましたことを、誠に意義深く、ここでの成果が世界に向けて広く発信されることは、防災教育の世界的発展に結びつくものと考えております。



「ぼうさい探検隊マップコンクール」がますます発展し、多くの子どもたちが防災や安全について力をつけていくことを願う」と佐藤氏

個人的な話ではございますが、4年前まで私は宮城県の学校に勤めておりまして、震災当時は中学校の教頭をしていました。私がいた学校は内陸に位置しており、津波の被害はありませんでした。それでも地域の方々が学校に避難をされておりましたので、授業を再開するまでの間、私も学校に寝泊りをしていたという経験があります。

現在は文部科学省で防災教育を含む学校の安全に関する仕事をさせていただいております。東日本大震災の被災地はもちろん、他の災害の被災地、あるいは学校の事故等の現場に出向き、被害者の方、ご遺族の方からお話、お気持ちをお伺いする機会があります。二度と同じような事故・災害が発生しないよう、安全教育・防災教育をいっそう充実させていかなければならないと強く思っているところです。先ほど教科書の話もありました。現行の学習指導要領においては、「防災教育を含む安全教育について学校の教育活動全体を通じて適切に行ってください」、と示されています。しかし、すべての学校においてそれが効果的に行われてはいないのではないかとのご指摘もいただいております。安全教育の充実をはかるため、今年度、中央教育審議会のもとに学校安全部会という組織を立上げまして、今後の安全教育についてご意見をいただいております。指導時間をきちんと確保すること、あるいは子どもたちが身につけるべき資質や能力を明確化して指導體制を充実させること。こういった環境整備をはかることが重要であるというような取りまとめを昨年11月に出したところでございます。今後は引き続き、次の学習指導要領改訂に向けて、教育課程全体の議論の中で実現に向けていくということになるかと思っております。

また、平成24年4月に閣議決定された「学校安全の推進に関する計画」がございまして、この計画に沿って教職員の資質向上のため、たとえば大学の教員養成課程の中できちんと安全や防災について指導していく、たとえば現職の教員についても研修をいっそう充実させる、こういったことについても検討準備を進めているところでございます。

さて、今日表彰式を行いました「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」が始まって11年。今日は室崎先生のコーディネートのもと、全国各地、あるいはいろいろなお立場の方から防災教育について貴重なご意見をいただくことができました。子どもが自ら危険を予測して回避する、いわゆる危険回避能力育成にこのマップ作りの活動が大きな影響を与えるというようなこと。あるいは自分たちだけでなく学校の仲間、家族、さらには地域を巻き込んで大きな動きに発展していつている、そのような10年の成果の広がりというのをあらためて感じるすることができました。防災教育の普及啓発を通じて、安全で安心な社会作りに貢献しようとする活動は、日本だけではなく世界に共通した願いだと思っております。今政府が掲げている、強くしてしなやかな街づくり・国づくり、すなわち国土強靱化の政策にも合致するものと思っております。今後もこの「ぼうさい探検隊マップコンクール」がますます発展し、多くの子どもたちが防災や安全について力をつけていくことを願いますとともに、本日お集まりの皆さまには、引き続きご支援、ご協力をたまわりますようお願いいたしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。

◆回答者の内訳

回答数61				所属				
性別	男性	女性	計	a.教育・研究関係者	b.消防関係者	c.行政関係者	d.損保関係者	e.その他
10代	1	1	2	12人	6人	6人	26人	10人
20代	7	5	12					
30代	1	1	2					
40代	12	5	17					
50代	11	2	13					
60代	9	1	10					
70代	1	2	3					
80代	0	1	1					
無記入	0	1	1					
計	42人	19人	61人					

※無記入 1

Q1. 全体について

(1) 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか？（複数回答可）

a.協会HP	b.開催チラシ	c.友人、知人の紹介	d.所属団体・企業からのご案内	e.メールマガジン	f.新聞等マスコミ	g.国連防災世界会議HP	h.その他
10	9	5	28	0	1	6	5

(2) 参加された動機（理由）をお聞かせください（複数回答可）

a.テーマに興味があった	b.第1部・表彰式に興味があった	c.第2部の内容・出演者に興味があった	d.その他
29	15	23	4

Q2. 第2部 パネルディスカッション「子どもが主役の防災教育の実践」について

(1) 内容の感想や満足度はいかがですか？

※無記入 7

a.期待以上	b.期待どおり	c.やや期待はずれ	d.期待はずれ
21	33	0	0

(2) パネルディスカッションの時間はいかがですか？ ※無記入 7

a.短い	b.ちょうどよい	c.長い
2	49	3

(3) 今回のパネルディスカッションの感想をお聞かせください。

※内容や出演者、特に印象に残った点など

主なもの

- ◇子供達が自分で考える、考えをひきだすという点で共感しました。
→ 他に、パネリストの考えや意見等に共感や感銘するもの (8)
- ◇室崎先生をはじめ、パネリストの方々が専門的かつ熱心に防災教育に取り組んでおられ、経験豊かな話が聞けた。
→ 他に、パネリストの話が有意義であった、理解が深まった、参考になったというもの (10)
- ◇防災への取り組みを続けることで、広がりを見せている点、大変素晴らしいと思いました。
また、よく準備されて大変素晴らしい進行でした。
→ 他に、「ぼうさい探検隊」やパネリストの活動等を評価するもの (4)
- ◇子供の教育にフォーカスを置いている点で共感できるが、その取り組みを地域に落とし込む施策が必要と感じた。子供を守るべき大人への防災教育も視野に入れる必要があると思う。
- ◇地域の人が毎年あるいは全クラスのインタビューをうけたり、訪問があることで迷惑にならないか、その事前調整・協力依頼も必要か。抜きうち防災訓練は素晴らしい取組だと感じました。地図の作成も中・高・大学生もしていくといいとお話されていたが、マンパワーとして特に大学生は地域に貢献できると感じた。

Q3. その他

今後、当協会が防災に関する教育・啓発事業を進めていくうえで、具体的なアイデアやヒントがあればお聞かせください。

主なもの

【情報発信】

- ◇防犯に関するニュースや情報を発信してほしい。
- ◇国際的な連携に向けてもっと活動・発信してほしい。

【地域や世代横断の関与】

- ◇小学生だけでなく、子どもたちを中心に地域が一体となって防災に取り組める仕組みづくりに発展させて頂きたい。
- ◇子供の気付きに大人が気付くには防災マップの作成がどれほど重要かはよく分からない。地図作りが目的ではないという話があったが、子供の活動にどれだけ大人が目を向けて、その活動を応援できるかが、今後の課題。よって、子供も大人も参加して一緒に活動する必要があると感じた。
- ◇パネルディスカッションにもありましたが、小学生以外にも窓口を開いてほしい。
- ◇とにかくまわりの人をまき込んでいくことが大切と思う。そして続けていくことだと思います。

【取組みの推進、活性化】

- ◇企業・学校との連携を今後より充実させていくことも大切だと感じた。
- ◇探検隊の成果を自治体でも取り上げていただける様になると、取組みがさらに活性化する様に思いました。応援します。
- ◇都道府県と協力し、地域の校長会など、実施の推進力となる人へピンポイントで意識啓発を行うことが有効ではないか。
- ◇子どもが防災教育の主役であるが、地域での有力な防災啓発サポーターとして、損保OB・OGら元気なシニアの力添えを得ていくべき。損保OB・OGは防災・防犯・交通にも関心が高い。
- ◇小学校3,4年生社会科でマップ作りの学習が盛り込まれます。そこで、そのマップ作りの部分に特化した募集をすることで、各学校の取組を加速できるのではないか。
- ◇マップをグーグルかヤフーマップに重ね合わせできたら、目についておもしろいと思います。
- ◇入賞したり出品された作品を掲載したカレンダーを作ってはどうか?カレンダーは毎日目にするものですし、作品が載っていれば子ども達も喜び、興味がさらに増えてくるのが期待できると思います。
- ◇防災マップ作品集を作ってほしい。具体例があると取り組みやすい。

第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム

防災教育フォーラム

「子どもが主役の防災教育」の実践

～ぼうさい探検隊これまでの10年とこれからの10年～

2015年5月発行

一般社団法人 日本損害保険協会
生活サービス部 啓発・教育グループ

〒101-8335 東京都千代田区神田淡路町2-9

TEL：03-3255-1215

URL:<http://www.sonpo.or.jp>
